
野球馬鹿の破茶目茶物語

エンゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球馬鹿の破茶目茶物語

【Nコード】

N8083Z

【作者名】

エンゼル

【あらすじ】

パワポケの二次創作です。夏目准が同級生にしたり、主人公がチートだったり、いろいろ勝手ですが頑張っていきます。主人公、黒崎京介（パワポケ13主）を中心に起こる様々な出来事をパワポケならではの個性豊かなメンバーで過ごす野球物語です（あんまり野球しないけれど）。キャラクターの性格は変えませんが年齢、設定、家庭事情は原作と違うことがあります。ご注意ください。

1 回表 親切（前書き）

パワポケの二次創作で、いろいろなことをするオリジナル？ストーリーです。

なかなかパワポケの二次創作って見付からないので、ちょっとチャレンジをしました。

まだまだ初心者ですがよろしくです。

1回表 親切

俺は親切高校野球部の一員だ。と言っても全寮制じゃないし、ペラという制度もない。普通の高校だから勘違いしないでほしい。まあ、オリジナルの高校だと思ってくれ。というか、若干メンバーにも無理があるが気にしないでほしい。夏目准を同級生にするっつーのもキツイんだ。簡潔に話すと何もかもオリジナルだ。

「京介？どうしたんだ？」

「……優輝か？ふああ……眠いなあ」

俺は黒崎京介。親切高校の……ってもう言ったか。時期は高校2年生で夏の大会が終わり先輩が引退したばかりの時だ。キャプテンは誰にするか迷った結果、俺になったのだが……。

「キャプテンなんだからもうちょっと指示だしてよ。いきなり2日連続自主練はちょっと……」

コイツは雨崎優輝。俺と同じで野球部、しかもエースだ。俺はキャッチャーだからバッテリーを組んでるってわけだ。球速も凄いいし、変化球も凄いのこの弱気な性格は何かならないのか？

「俺にだって考えがあるんだよ。いきなり張り切ってキツイ練習より、俺がキャプテンになったことを皆に馴染ませないとな」

「寝てたじゃないか……」

親切高校の野球部は強いらしいのだが、ここ数年はベスト16止まりだからな。

「先輩のためにも練習しようよ」

「はいはい。わかったよ」

とりあえずオリジナル版親切高校の説明をしとくさ。小学校、中学校、高校が全部敷地内にあり、体育館やらグラウンドが別なのでものすごい広いわけだ。俺も親切小学校から親切高校までの10年間は同じ通学路を歩いている。勉強よりもスポーツに力を入れている学校だ。

「本当に京介はマイペースだね……」

「ただ単にどうしたらチームをまとめれるか考えてただけだぜ？」

で、結局は自主練という名目でサボっていた。明日からはコーチも来るから無理だけだな。解散となり変わらぬ通学路を歩き帰った。いつもなら妹に飯を作るのだが友達の家泊まるらしいから、適当に飯を食って寝よう……。

翌日の朝。出かける準備をしている最中、呼び鈴が鳴った。誰だ？

「どちら様？」

「私だよ、千羽矢だよ」

優輝の妹の雨崎千羽矢。優輝とは幼なじみだから、一応幼なじみだ。

「チハか？どうした？」

「一緒に学校行こうよっ！！」

「いいけど、珍しいな？チハが俺の家に来るなんて」

「たまには京介君と話しながら学校行きたいなって思ったただだよ？」

チハは俺のイメージでは小悪魔って奴かな。小さい頃からよくからかわれていたんだ。野球部のマネージャーでもあり、「可愛いマネージャーがいるから俺は頑張れるぜえっ！！」とか言ってる先輩もいたもんだ。

「何だ？話でもあるのか？」

「まあね〜。おニイともめちゃったからねえ〜」優輝とチハは仲が良いため喧嘩はないのだが、もめることは多々ある。

「放っておくのもどうかと思うから話を聞かせてくれないか？」

「聞いて聞いて！先輩に告られたんだけど、しつこいから『私には心に決めた人がいるの！！』って言ったの」

「んで、それが優輝の耳に入って聞かれた……とか？」

「あつたりー！！おニイったら本当に心配性なんだから……」

「優輝らしいなあ……」

俺は恋愛系の話は苦手なんだけどな。まだ1回も女子と付き合っていない。野球一筋だった俺に女子と触れ合う機会が無かったからな。

「京介君にはいないの？好きな女の子」

「考えたこともなかったな」

「むー、勿体ないよ。京介君カッコいいのに」

「そりゃ、ありがとよ」

「本心なのに……」

自分のルックスは他人から見たらどうなのだろうか？自分の性格は他人からはどう思われているのか？きっと好きな人がいるのなら、それを考えているんだと思う。だが、俺は全部野球で主張してきた。その俺が他人の恋愛事に首をつっこむなど持つての他だ。

「チハにはいるんだろ？心に決めた人が」

「それは言葉のあやつてやつだよ」

チハは目をそらす。嘘をついてるのだろうか？しかし、これ以上聞くのも失礼だろう。

「…っ!？」

「どうしたの？京介君？」

「俺の本能が『早くここから逃げろ』って指示してるんだ」

「……何それ？」

きつとこれは合図だ。俺を中心とした半径100メートルにアイツが入ったのだろう。しかも走ってきている。俺も走らなければ捕まってしまう！

「チハ、悪い！先に行く!!」

「えっ？あ、うん」

俺は走りだした。けれど遅かったようだ。突然、肩に『ガシッ』という音が鳴り進むのが遅くなった。

「朝ぐらいゆつくりさせてくれよ………梨子」

「なぐに言ってるのよ！もうちょっとで夏休みなんだからねっ！」

石川梨子。幼なじみで、天下のトラブルメーカー。常日頃からトラブルを起こし、俺がその場を収めているから1番俺が大変なんだ。

「まあ、俺も楽しみなんだけどさあ」

「早く教室に行って海に行くメンバー誘おうよ」

夏休みのお盆で海に行く予定がある。初めてではないが、幼少の頃だからちゃんと覚えているわけではない。海での思い出もほしいんだよな。

「行くよっ！京介！」

「わかってるから引つ張るなよー、梨子」

梨子に引つ張られて学校に向かう俺ら。

「お似合いのカップルだと思っただけだなー」

後ろから聞こえたチハの独り言は風の音にかき消された。

「その日は忙しいんだ、悪い京介」
「別にいいぜ、優作」

野球部のやつらは全滅だった。というかその日はお盆以外で唯一の部活が休みであり、皆はその日に用事をいれていた。

「京介！メンバー集まったよ！！」
「早っ！？まだいないんだけど！？」
「えっー？京介使えない」

梨子に使えないと言われると地味に心が痛い。いつもお前のトラブルを処理してるのは誰だと思っているんだ。

「誰が来るんだ？」
「あたし、夏菜、漣だね」

霧生夏菜は梨子の親友？みたいな人で、性格は優輝より男っぽいのかな？浅井漣は神桜中出身の人で天然系というのかな？まあ、そんな人だ。

「京介！お前、海に行くって本当か！？」
「うおっ！？いつからいたんだよ越後！？」
「あれ、越ゴリラだ」

越ゴリラ。説明省略。

「俺も海に行きたいぜええ!!」

「梨子と霧生が許す次第だがいいんじゃないか？」

「恩に着るぜ!」

「ちよつと!!越ゴリラ!!あたしたちが行くのは海水浴場なのよ!!釣りはやそでやってよね!」

「俺はそこまで馬鹿じゃないぜ!この前のテストでやっと丸が貰えたんだぜ?」

「それって今まで0点ってことかよ……」

「あたしなんて英語で?を全問正解したのよ!!」

「なんだってー!!!」

「いや、あそこ超簡単な基礎的な単語入れるだけだろ」

コイツらは、本当に卒業できるのか?越後とか赤点を何回採ってるんだよ?

「そういえば、何で京介って頭いいの?」

「確かに。俺が知っている限りじゃ、野球部で1番だったはずだ」

「真面目に授業を受けてるからだ!寝てないでノートに書け。そして、出来るから」

「「やだ、面倒くさい」」

「何てこつたい」

「席に着け!ホームルーム始めるぞ」

担任の大河内先生が来て談話は終了した。

「教科担任にテストを返すように言われてるから返すぞ」

「梨子、勝負だぜ!!」

「あたしに勝てると思ってるの?」

越後と梨子は何か争ってるしよ……。つつこむのも面倒くさいな。

「黒崎。次も頑張れよ」

「はいよつと」

先生から受け取った数学の点数は86点。俺の得意教科なので高い点数を採れる。

「あたしの勝ちねっ！」

「ちくしょう……。ここさえ間違えなければ!!」

越後と梨子のテストに目をやる。机の上に置きっぱなしなので丸見えだ。

石川梨子 19点

越後竜太郎 15点

「お前ら勉強しろ」

まず、つつこみたかった。なんかいい勝負してるかな?と思ったらどっちも赤点じゃないかよ!

「石川!越後!高科!お前らは赤点だから補習だぞ」

「ええっ!」

このメンバーはいつもの赤点組だ。梨子とはたまに勉強会をして赤点を回避することがあるのだが、今回は勉強会をしてないんだよな。

「1学期期末考査のテストの結果は廊下の掲示板にでているので目

を通すように。以上！」

休み時間になるとクラスメートはテストを見せ合ったり、自分の順位を確かめに行ったりしている。

「黒崎君。テストの結果を見に行きませんか？」

「桜空か。いいけどよ、お前のお姉さんはなんとかならないのか？」

芳槻桜空。中学校から知り合いになった女子だ。照れ屋さんで出会った頃は大変だったもんだ。それでそのお姉さんが……、

「京介君！ついにやりましたよ！！」

「何がだ？」

「ふっふっふ。なんと！！梨子ちゃんとヲを抜きましたよ！！」

そう言っただけに見せてきたのは、

高科奈桜 21点

あつ。ラっというのは越後のことだから。

「お姉ちゃん！勉強しないと留年しちゃうよ！」

「確かに越後や梨子はたまに赤点を回避してるけど、高科は毎回だからな」

「ソレハソノトキカンガエマスヨ？」

「棒読みじゃないかよ」

高科奈桜。桜空の姉で妹と全く正反対の性格をしてて、その姿は梨子を錯覚させる。名字が違うのはまた別の機会に説明するよ。

「私は53位ですか……。」

「あたしは12位ですよ!!」

「……下からだろ」

「黒崎君は……24位ですか!?!?すごいです」

1クラス40人で4クラス160人だ。下から12位となると……、

「149位はさすがにマズいだろうが」

「お姉ちゃん……」

「そんな目で見ないでくださいよ!?!」

今日の昼休みも平和だった(笑)。

部活の時間になる。車坂という鬼コーチが今日来る。先日まで誰かに会いに行っていたらしい。だから、今日の部活はキツくなるな。

「京介、新しいバットの色は何にした?」

「黒だよ。やっぱりどんな色よりも黒が落ち着くからな」

「京介らしいね。なあ、俺らが最初に公園で会った時のこと覚えてる?」

「ああ、もちろんだ」

「約10年前」

「ポジションはどこなんだ？」

「うん。ピッチャーがいいな」

「そこはダメだ。俺がエースで4番だからな」

「ええっ！僕だってエースで4番がいい！」

「なら、どっちかがエース、どっちかが4番に分けないか？」

「じゃあ、僕はエースにしようかな」

「なら俺は4番だ。俺がキャッチャーになれば俺らはバッテリーってことだな？」

「黒崎君はキャッチャーをやるの？」

「エースと4番がバッテリーってカッコいいじゃんかよ？」

「現在」

「地味に恥ずかしいこと言ったな俺」

幼い日の思い出である。優輝とは近くの公園で知り合った。この頃は本当にエースで4番を目指していた。ただ他人に頼らず勝とうとしていたなんて馬鹿すぎて言えない。

「あの時、俺が4番を選んでいたらどうなったんだろう?。」

「そんなの、俺がエース、優輝が4番だろ」

「あはは、そのまんまだね。でも、そっちのほうが良かったかも」

確かに今思えばピッチャーも悪くはないと感じている。

「馬鹿だな。こういうのはやり直しが効かないんだよ」

「……………そうだね」

昔話を終えて部室を出る。グラウンドの方を見ると、車坂コーチがいた。なぜか部員を集めて話をしているみたいだな?

「お願いしやつす!」

「おい……………黒崎。話がある」

「なんすか?」

あからさまに怒ってる(笑) まあ、原因はわかってるけど。

「2日連続で自主練っていうのはないんじゃないか?」

「まあ、聞いてくださいよ」

で、事情説明した。無駄だと思うがちょっと位抵抗しところかな。

「……………全く。東はなぜ、黒崎をキャプテンにしたんだか」

「優輝でも良かったんですけどねー」

「雨崎は皆の意見を聞いてまとめようとするんじゃないか?」

「まあ、アイツの性格ならあり得なくもないな」

このまま自主練のことを忘れさせれるかな?

「黒崎、外周50周行ってこい」

「殺す気か!？」

外周はとても広いのできつとフルマラソンを余裕で越えてしまうだろうが!？」

「時間がないから5周でいい。行ってこい」

「はい!」

嫌々、走ることとなった。一周に10分かかるので、練習に参加するのは5時位かな？

「黒崎君。何やってんの？」

「走ってんだよ。木村なら理由を言わなくてもわかるだろ？」

「ええ、2日連続自主練なんてしてたらこれ位当然でしょう？」

木村冴花。野球部のマネージャーの1人で、ちょっと厳しいことを言うが真面目な人だ。

「ちっ、キャプテンって面倒くさいな……………」

「何言ってるのよ。あなたは4番で雨崎君とバッテリー組んでプロのスカウトがきたほどなんでしょ？」

「キャプテンに大事なのはそんなじゃねえよ」

俺にはキャプテンになったところでどうしたら皆が効率的な練習ができるのかは全くわからないのだ。

「とりあえず外周頑張ってね」

「後、3周とか怠いわ」

木村と別れ再び走りだす。走り終わっても地獄の練習（サボったのでいつもの2倍）を死ぬ気でやりきった。後、夏休みまで1週間だから明日も頑張るかな…………。

1 回表 親切（後書き）

京介「俺って13主設定なのか？」

作者「ルックスだけね。性格は少しツンデレっぽくなったけど」

千羽矢「たしか、13主ってパワポケ史上最高のイケメンだよな？」

優輝「うん。実際ポケ体だからニコ動とかで二次創作見たほうがいいと思うよ」

作者「つーか、ツンデレを否定しなんだな」

京介「いや、ツンデレじゃないし」

梨子「1話目からだけどキャラ説明多くない？」

作者「そりゃ、クラス40人全員がパワポケの主要キャラクターだった人たちだからな」

京介「マジかよ……」

竜太郎「なんで俺の紹介が省略されてんだぁー！？」

作者「パワポケ知ってる人ならわかるだろ」

竜太郎「つまり、俺は有名人ってことかよ！？さすがだな俺ー！」

冴花「馬鹿ね……」

1回裏 天才（前書き）

裏物語。

黒崎京介が表の主演。

黒崎京介以外の人が裏の主演。

と言ったかんじで話を進めていきます。

今回は雨崎千羽矢視点です。

1回裏 天才

「私には心に決めた人がいるの!!」

「……………そうか」

本当にしつこい。この先輩に何回告られてるんだろう?だから私は男子が絶対に諦めてくれそうな告白の返事をした。

「その心に決めた人ってのは誰なんだ!?俺、そいつに近付けるように頑張るからよ!!」

「……………」

私は答えが出せなかった。「心に決めた人がいるの!!」なんて、言葉のあやだったから。

「ごめんなさい……………」

そう言っただけで逃げるように立ち去った。帰る道の途中、私はため息が出なかった。……………実は答えを知っているんだもの。

「はぁ……………」

答えはお二伊と京介君。私にとってはお二伊は家族として本当に好き。私を大切にしてくれる立派なお兄ちゃんだ。たまに頼りないけど。

「京介君は……………」

そう。問題は京介君。彼は幼なじみで、私達兄妹が喧嘩をしてれば、

いっつも仲直りをさせてくれる。まるでもう1人のお兄ちゃんみたいな人だ。そして、野球を教えてくれたのも京介君だった。

「千羽矢！一緒に帰ろうよ」

「あれ？おニイ！」

私のお兄ちゃんだ。タイミングがいいのか、悪いのか。

「どうしたんだ千羽矢？浮かない顔してるよ？」

「うーん、ちよつとね。問題の答えが出なくて」

「千羽矢が解けない問題なんてあつたんだ！？」

「そりゃね」

私はおニイにさっきの告白から今なんで悩んでいるか話した。すると思案顔でおニイが、

「心に決めた人って誰なんだ？」

なんて聞いてきたよ……。おニイは私の愛する人に興味津々みたいだ。

「それで迷ってるの！」

「あんな先輩とかは俺が認めないからな！」

「なんで、おニイが決め付けるのさ！！」

「……………」

この時、おニイはなんて言いたかったか私にはわかる。それは私達家族しか知らない秘密。

「フン！」

それに気付かないふりをしてその場を駆け足で去った。その後は顔も合わせず1日を終えた。

いつもより早い時間に私は起きた。登校はおニイか友達と行くけれど今日は違う。そのためには早く出かけないといけない。

「行って来ます」

誰もいないリビングに言った。もちろん返事はない。外を見ればまだ太陽が昇ったばかりだった。私はその人の家に行って一緒に登校しようと思った。

ピンポン、と呼び鈴になる。

「どちら様？」

「私だよ、千羽矢だよ」

ドアが開く。そこにいたのは黒崎京介君。ルックスは先輩の雪白さん？といい勝負をする位いいし、性格だってマイペースで怠そうに行動してるけれど、内心はちゃんと他の人のことも考えてくれている。……それに頭がいいときたもんだから完璧超人なのよね。

「チハか？どうした？」

「一緒に学校行こうよっ！！」

「いいけど、珍しいな？チハが俺の家に来るなんて」

「たまには京介君と話しながら学校行きたいなって思ったただだよ？」

そんな完璧超人こと黒崎京介君にも苦手なことがあるみたい。

まず美術がまるでダメで、京介君が唯一出来ない教科みたい。本当に絵心がないの。そして恋愛に関しての知識は全くと言っていいほどないと思う。女の子と付き合ったこともなく、そういう話に関わったことがないなんて、今時珍しい高校生だね。

「何だ？話でもあるのか？」

「まあね。おニイともめちゃったからねえ」

「放っておくのもどうかと思うから話を聞かせてくれないか？」

京介君は……また私達に気を利かせている。嬉しいな。京介君にも先輩の告白のことを話した。すると京介君はおニイともめてる理由を当ててしまった。凄い勘？だなあ。

「京介君にはいないの？好きな女の子」

「考えたこともなかったな」

即答。いくらなんでも早すぎるっての！

「むー、勿体ないよ。京介君カッコいいのに」

「そりゃ、ありがとよ」

軽く流されてしまった。今の言葉は紛れもない私の本心だ。きっと京介君は冗談で言ってると思われるんだ。

「本心なのに……」

呟いてしまう。京介君を好きな女の子はいっぱいいると思う。ま、きっと鈍いから気付かないけど。

「チハにはいるんだろ？心に決めた人が」
「それは言葉のあやってやつだよ」

京介君と目が合ってしまったけど、その純粋な目は考えを見透かされそうだった。つい目をそらしてしまっちゃった。

「……っ！？」

「どうしたの？京介君？」

突然、京介君が「やってしまった」みたいな顔をしているので声をかける。

「俺の本能が『早くここから逃げろ』って指示してるんだ」

「……何それ？」

「チハ、悪い！先に行く！！」

「えっ？あ、うん」

京介君は走りだした。その直後、私の横を誰かが通り過ぎた。そしてその人は京介君の肩を掴み言い争っていた。京介君の幼なじみの梨子さんだ。京介君曰く「天下のトラブルメーカー」らしい。梨子さんとは、あまり話したことはない。京介君と梨子さんは幼稚園からの幼なじみ、私達は近所での幼なじみなので話す機会がないの。

しばらくすると梨子さんが京介君を引っ張るように走りだした。

「お似合いのカップルだと思っただけだなー」

妬いちゃうなあー。でも京介君と梨子さんってどっちかというところ……、

「バカップル……なのかな？」

私は苦笑した。

「雨崎くん！さすがだ！次のテストもこの調子で頑張ってたまえ！」

「はいはい、本村先生」

数学のテストが返ってきた。その点数は100点。数学は公式さえ覚えてれば楽だったので勉強は少しだけで済んだ。

「千羽矢さんは100点ですか？凄いです！！」

「若葉は何点だったの？」

深草若葉。神桜中出身の1年生ながらも生徒会書記を頑張っている子だ。男子と話している時にまだ慣れてなくて小動物みたいな感じ

がほんっーとに可愛いのよ!!

「お恥ずかしながら……………」

「96点でも凄いつて!!ほらほら胸張つて!!」

「千羽矢さんっ!?胸張つてなんてそんな大声で……………」

「若葉のサイズなら世間でも充分通用するよ?」

「わっ!わっ!千羽矢さん!!」

慌てる若葉も可愛いなあ……………。

「テストの結果は廊下の掲示板に載ってるから確認するように。はい!ホームルーム終わり!」

本村先生のホームルームが終わると皆で廊下の掲示板に移動した。

「千羽矢!結果見に行こうよ」

「しのぶ、どうしたの?やけに自信满满々だけど?」

室町しのぶ。同級生で少しおつちよこちよいで、バイト頑張ってる真面目な子だ。

「今回は全テストの平均を越えたんだよ!!」

「しのぶ頑張ったね」

何かとケアレスミスが多いしのぶなので今回は凄く頑張ったと思うよ。慌てすぎて解答欄がずれたり、新しい漢字を作ったりしてたなあ。

「しのぶさん、私も一緒によろしいですか?」

「うん!行こうよ!」

廊下の掲示板には、

1位 雨崎千羽矢

2位 深草若葉

とあった。

「さすが天才少女雨崎さんだな」

「深草さんも凄いなあ」

と、私達を褒める声がちらほら聞こえて若葉は少し恥ずかしそうだった。

「やっぱり凄いなあ」千羽矢と若葉は

「お褒めいただき光栄です」

「しのぶは……59位だね!! 前回よりも20位ほど上がったよ!!」

「やったーっ!」

私も京介君と梨子さんみたいな仲の人はいないけど、こんなにワイワイできるのは若葉やしのぶのおかげだね!!

「千羽矢さん、楽しそうですね?」

「うん? そう見える?」

「はい。今朝は少し思い詰めた表情でしたが」

「そういえば千羽矢。朝に黒崎先輩と一緒にだったよね?」

……見られていたなんて。でも恥ずかしいことじゃないから大丈夫だ私!

「黒崎先輩と何かあったの？」

「何もないよ。授業始まるから席戻ろう？」

「そうですね」

若葉は席に戻って次の授業の英語を準備をしている。

「千羽矢！悩んでいるなら相談してね？」

「ありがと……しのぶ」

しのぶも自分の席に戻って数学の準備をしている。……次は英語なのに。アハハ、おつちよこちよいだな……。

「今日の車坂コーチは機嫌がいい」と何人かに話したけれど信じてもらえなかった。たしかに、2日連続自主練なんてしてればコーチも怒る。でも、京介君に外周5周は何となく甘いなあと思った。

「チハちゃん、お疲れ様」

「玲奈さん、お疲れ様です」

霧島玲奈さん。京介君と同じクラスで野球部のマネージャーさん。小動物みたいな若葉の可愛さと違って、玲奈さんは美人でスタイル

がいい。…………私もう少し色気が欲しいな。

「あれ？黒崎君は？」

「京介君なら外周走ってます。外周5周なので5時位に戻ってくると思います」

「…………大変だね」

外周5周って他の野球部なら何となくマシに聞こえるけど、親切高校は本当に長いの！！

「玲奈さんは京介君のこと気に掛けてますか？」

「えっ！？いや、そういうわけじゃ……………」

反応が怪しいなあ。やっぱり京介君は人気者なんだろうね。

「ライバル多いですよ」

「私は狙ってないから大丈夫よ。チハちゃんはどうなの？」

「私は…………今の関係で満足です」

京介君、おニイ、私の3人でいられるのでいいのかもしれない。京介君もそう望んでいるんじゃないかな？

「それと…………京介君は鈍感ですから」

「確かに。石川さんや芳槻さんがアタックしてるのに全く気付かないもんね」

「芳槻さん？」

その人の名前は初耳だった。でも京介君にアタックしようとしている私の同学年の人もいるから珍しくないのかな？

「京介君が名前で呼ぶ数少ない人だからね。仲いいんじゃないかな？」

「……京介君が名前で呼ぶってかなり珍しい。知ってる中で梨子さん、芳槻さん、京介君の妹、私？位で、名字で呼ぶタイプだと思っていたのに……。幼なじみ以外でも名前で呼ぶ人がいたんだ。」

「芳槻さんは中学生の頃に何かあったんだと思う。それを境に明るい性格になってたからね」

「それまで暗かったってことですか？」

「うん。他人を拒絶しちゃってたけど……京介君が助けてくれたんじゃないかな」

それなら京介君に惚れてもおかしくはない。お人好しなんだろうね

……京介君。

1回裏 天才（後書き）

玲奈「裏物語で出されてもね……………」

作者「そのうち、表で出てくるから大丈夫だつて」

千羽矢「若葉としてのぶが同級生って凄い発想だよな」

若葉「神桜中って何なんでしょう?」

作者「そこはネタバレだから言えないな」

京介「何か……………余ったキャラを適当に突っ込んでないか?」

若葉&しのぶ「……………」

作者「……………仕方なくね?クラス40人以上にしたら酷いことになる
だろ?準レギュラー枠なんだからよ」

京介「あの3人はまず出さないでくれよ……………」

作者「俺だって出したくないさ……………」

2 回表 義妹（前書き）

今回は黒崎京介の妹の登場です。タイトルでわかと思いますが……。

余談ですが彼女候補の皆を出せるように頑張っていきます。

2回表 義妹

俺は1人っ子で家族は外国で暮らしているから、本来、家には誰にもいない。

「ただいま」

「お帰りなさいです。お兄ちゃん！」

が、妹がいる。さっき1人っ子って言ったが、別に隠し子とか血が繋がっていないとかではなく、形だけの兄妹である。

「昨日泊まった人にちゃんとお礼したか？」

「はいです！とても楽しかったです！」

別に俺がロリコンと言うわけでもない。かといって妹萌えとかでもない。

「じゃあ、飯作るからちょっと待っててくれ」

「その必要はないですよ！アカネが作っておきました！！」

昔話は好きじゃないけど大事なことから話しておく。俺の義妹、高坂茜とその出会いについて。

2年前

「優輝、俺は夕食を買って帰るからよ」

「あつ、そうか。京介は1人暮らしだもんね。また明日」
「おう、じゃあな」

中3の俺、黒崎京介は親が外国暮らしのため家事は自分で全てやっている。両親から生活費を貰っているが、少し多めなので豪華な食事でも作るうか……。

「卵がねえんだよな……」

近くのスーパーに近道のために公園を通る。すると、少し草むらに隠れているけど何か……カラフルっぽい色が見えた。

「何だ？」

好奇心が湧いたので調べに行く。それが見える直前。ピンクのパーカーを着ている小学生位の子が倒れていた。

「おい！大丈夫か！？」

「あ……う……」

意識はある。おでこを触ると体温計がなくともわかる。39 は越えてるかもしれない……！

「今、救急車呼ぶからな！！」

「え……ゆ……」

「もしもし！救急です！！外で女の子が倒れてて！意識はあるけど、凄い熱です！場所は小波公園です！」

その日の俺はもしかしたら生きてて1番動揺していたかもしれない。救急車が着いて少女と一緒に救急車に付き添うことになった。病院に

着いて少女は運ばれていった。保護者とも連絡が取れないので、少女と会話ができるまで待った。

「ん？あれ……………」

「目、覚めたか？」

少女の目が覚める。今の時間は19時。ずいぶん遅くなったけど、公園で行き倒れになっていた少女を救えてよかったと思う。

「あの……………あなたは？」

「俺は黒崎京介。親切中3年だ。公園で倒れてたから救急車呼んだんだ」

「ありがとうございます……………」

少女は体を起こそうとするけどまたベットに倒れてしまう。

「おい、無理すんなって。ゆっくり休めよ」

「すみません」

「とりあえず、2日3日は安静にしてろよ。学校に連絡入れとくからよ」

少女は申し訳なさそうに頭を下げた。

「名前と学校を教えてくださいませんか？知らない人に個人情報をお教えるのがダメなら親の連絡先を頼む」

「名前は高坂茜です。親切中の1年生です」

少女の名前は高坂茜。まあ、聞きたいことはいろいろある。なぜ公園で倒れていたのか？まずこれが1番の疑問だ。その前に……、

「中学生だったんだ！？」

「むっ、失礼ですね。身長はまだ成長してませんが、他のところは急速に成長してますー！！」

女の子としてどうかと思う発言をしているがスルーで。

「何で公園で倒れていたんだ？人から見えないあんな林の中で？」
「華麗にスルーされました、悲しいです。そこで暮らしているからです」

……………？

「もう1回、何て言っただ？」

「？あの公園に家を建てて住んでいるのですよ」

「はああああ！？」

ちよつと待て！？公園に家を建てて住むって！？はああああ！？えええええ！？

「黒崎さん？病院では静かに、ですよ？」

「はっ！？ああ、悪い」

落ち着こう俺。きつと冗談だろう。そうだ、そうに違いない。

「黒崎さんにお願ひがあるんですけど……」
「何だ？」

病人のお願ひだから聞いてあげないとな。

「アカネの家族になつてくれませんか!？」

「看護師さん!？倒れた時に頭を打つたらしいから至急、脳外科へ搬送してください!!」

「頭は正常ですよ!？」

おかしい。梨子と話している以上に取り乱すなんてこの高坂茜は何者なんだ!？

「新手のプロポーズか!？結婚詐欺ならお断わりだ!!」

「贅沢は言いません!妹でお願いします!」

「ますます意味がわかんねえよ!？」

とても正気の沙汰とは思えない……。

「むう、全力で拒否されました。何がいけないんでしょう？」

「お前の言動だ!っーか、俺はまだ中3だからな?知らない中学生にそんなこと言うのは危ないぞ?」

俺は小学生の時から女子と付き合うことに興味をなくした。だから、中1の女子と兄妹の契りをかわすつもりはない。

「黒崎さんはいい人です!」

「倒れていた女の子を救つたからっていい人とは限らない」

「アカネが倒れてから何時間かしますが、ずっと付き添ってくれるなんていい人以外の何者でもありません!!」

「う……………それはだな」

返す言葉がない。3時間も待つてるのは勿論、心配だし何より保護者が1番心配してるだろう。

「それより、親への連絡はいいのか？」

「……………」

高坂は急に押し黙った。先ほどの明るい様子から一変している。もしかしたら俺は地雷を踏んだのかもしれない。

「ごめん。関係ない俺が聞いちゃいけないことだったな」

「いえ……………大丈夫です」

親が……………いないのか？公園に住んでも親がいなくて家もないからホームレス生活なら、退院した後どうするんだろうか？

「……………退院したら俺の家で暮らさないか？」

「……………えっ？」

「退院した直後にまた公園で暮らしてたら危ないからな」

「……………えっ？ええっ!？」

さっきとは違い、元気に驚いている高坂。梨子と同じでコイツには元気が似合うよ。

「答えるのが嫌なら言わなくていいが、質問がある」

「何ですか!？アカネのことですか!？」

「お前の親だ。俺の家で暮らす前にお前の親と連絡がとれて、そっ

ちで暮らせるならそうするんだ」

「……連絡はとれません」

……その時に感じたのは悲しみじゃなくて恐怖だった。親がいないじゃなく、家庭内暴力を受けているのかもしれない。

「わかった。退院したら俺に連絡をくれ。迎えに来るから」

「ありがとうございます。お兄ちゃん!!」

「待て、さらっとお兄ちゃんって呼ぶな」

「高い壁に阻まれました……。でもいつか亀裂が入る日が来ます
!」

「本人の前で言うなよ」

今まで1人暮らしで静かだった俺の家がにぎやかになるな、と思った。

「お大事にどうぞ」

「ありがとうございます」

隣には高坂。俺の家に来るのが楽しみで一睡もしてないらしい。
……病人が何やってんだよ。

「ついにお兄ちゃんのお家へレッツゴーです!!」

「別に何も変わっていることはないぞ。1人暮らしだったがお前にも何か手伝ってもらおう」

「はい!! 任せてください!!」

これで洗濯やら掃除やらを1人でやらなくて済むな。まあ、食費は増えるけれども。

「高坂は洗濯機使えるか? 公園暮らしなら洗濯機はなかったんじゃないか?」

「話を遮るようですみません。……………何で名字で呼ぶんですか!? お兄ちゃんなのに!!」

必死にスルーしてたのに……………。何でつつこまないといけないんだ!?

「俺だって兄弟とか欲しいなーとか思ってたけど、俺らは赤の他人だからだ!」

「これがお兄ちゃんの家ですか!? ドキドキします!!」

「話聞けよおー!!」

ダメだ。高坂と話していると梨子以上に取り乱してしまう。こんな破茶目茶な奴は初めてだ!

「アカネ、ここが俺の家だ」

「ついに兄妹の契りをかわしてくれました!!」

「違う!!」

取り敢えずアカネを中に入れる。俺の家は個室が2部屋あって、片方は使っていないからほこりまみれだ。

「アカネの部屋をここにする。汚いけど掃除をすれば公園よりかはマシになる」

「この掃除は任せてください！」

「いや？手伝うが……」

「今からお世話になるのに手伝ってもらうなんてとんでもありません！！」

アカネは真面目な顔でこっちを見てきた。兄妹の話で騒いでいて気付かなかったけどしっかりした子だと思う。

「じゃあ、部屋の掃除が終わったらアカネの日用品とか買いに行くか？」

「ありがとうございます！」

アカネが掃除している間に父さんと母さんに連絡入れようかな……。携帯を取り出し母さんに電話をかける。

「もしもし？京介？久しぶりねー」

「母さん？あのさ、報告があるんだけど」

「結婚！？」

「違うつて！！」

皆、早とちりしすぎだろう！！つつこむのに疲れてきたじゃんかよ！！

「俺の家にもう1人住むことになったけど、別にいいよな？」

「うんうん、全然大丈夫よ。付き合ってるの？」

「妹だ」

「そうなの。わかった。困ったら母さんに相談してね」

……え、ちよつとは、

「つつこめよおお!!」

「ちよつと京介!耳が痛くなつたじゃない!」

「妹につつこめ!俺は1人っ子って知ってるだろ!」

黒崎沙耶。俺の母さんだ。説明しなくてもわかる通りに天然で、会話が成立しないのが特徴だ。

「母さんだつて1人っ子よ?知ってるわよ」

「母さんが1人っ子は関係ないだろ!?父さんにも言ってくれ。じゃあな」

「え?お父さ…」

電話をきつた。しばらくは電源を消して繋がらなくしているか。母さんの話はたまにループするから強引にでもきらないと。

「お兄ちゃん!終わりました!!」

「よし、ご苦労様。じゃあ買い物に行くか?」

「最後にいいですか?アカネの家を回収したいのですけど……」

家を回収?何を言ってるんだ?

「いいけどよ?持ち運べるものなのか?」

「段ボールですから、少女でも持ち運べます!」

「段ボールウウウ!」

1人じゃつつこみきれないだど!?

「今、持ってきますね」
「お…おう」

とんでもない奴が俺の家に来たな……。できれば梨子とか高科には秘密にしとかなないとばれてしまうからな……。

「ただいมาแล้ว！これがアカネハウス2号です！！」
「コレ、イエジヤナイ！ダンボール！」

そこにあつたのはペンキでカラフルな色に塗られたダンボールに、窓までついていてメルヘンっぽい家（笑）だった。

「1号は台風で吹っ飛ばされました！」

「よく生きていけるな！？風呂はどうするんだ？」

「水泳部のシャワーを使ってます」

「トイレは？」

「公園にありますので」

「洗濯は？」

「溜めてコインランドリーです」

「金は？」

「前にアカネハウスの中に生活費と書かれたお金が置いてあったのでそれを少しずつ使ってます」

「……誰だよ？そんなことをしたのは？」

「たしかR i nって書かれてましたよ」

「リンさんかよ！？」

「知り合いですか！？」

リンさん。色々不明。梨子と一緒にいた時に突然現れた女の人。金髪で少し怖いイメージがあっただけ、優しい人だった。最近は全然会ってないけれど何かあったのかな？

「知り合いだけど、謎が多い人でどこにいるかわからないんだよ」
「お礼がしたいです……」
「まあ、スーパーに行こうか？女子が必要な生活用品は俺にはわからないからな」
「はいです！」

それから約1カ月。アカネは三者面談の話を俺にしてきた。

「夢だっतんです！三者面談を3人するのが！！」
「三者面談にも親は来ないのか？まあ、俺も親が外国だからいつつ
も2人だったけど」

俺は兄としての保護者扱いされてるらしい。アカネの担任が「兄でもいいから三者面談をします」と言ってしまったおかげで、アカネと俺は同じ中学校だから、物凄くシニールな三者面談になった。…
…アカネの担任の田中先生は俺の元担任だから、気まづくないか？

「では、中学校に行きましょう！！」
「部活で行ったからもう2回目だ」

アカネとの三者面談と言ってもまだ入学して間もないから、特に話

すこともないだろうと思っていた。

「おい、アカネ行くぞ？」

「制服に着替えるのが面倒です。休日なのに……」

「夢の三者面談をするんじゃないのか？」

「そうでした……！」

アカネと暮らしていてわかったのは、女子は出かけるのに準備がかかることだった。俺は持ち物をバッグに入れるだけだったが、アカネは髪を整えたり、服はどっちがいいか悩んだりしていた。……頭のアホ毛はいつもどおりだが。

「お待たせいたしました！」

「行くかあ。アカネ、成績表持ったか？」

「勿論です！」

アカネの成績はどうなんだろうか？少なくとも梨子よりはマシであってほしい。もしかしたら逆にチハ並に頭が良かったりしてな。

「アカネ、成績表見せてくれないか？」

「はいです！」

アカネの成績表に目を通す。

国語	5
数学	5
地理	5
理科	5
英語	5
音楽	5

美術 5

保健体育 4

家庭科 5

「アカネ………… お前って滅茶苦茶頭いいじゃん!!」

「そこまで誉められると照れますよ」

中1の俺より凄いな!?!ここ1ヶ月は暮らしていて勉強してないのに…………。天才ってやつだろうか?

「最近のテストは何位だった?点数も教えてくれ」

「1位でした。500満点中498点です」

紛れもない天才がすぐ近くに!?!本当にチハ並だな!!

「まあ………… 先生も三者面談したくなるよな……………」

現在

結局はアカネの親と連絡がとれないままだった。それと1回、優輝が家に遊びに来たので皆にはばれている。弁明はしたが梨子には心配そうな顔で「ロリコンなの?」って聞かれたのが、ダメージがかかった。

「そういえば海に行くけど、アカネも来るか？」

「はいです！アカネは海が大好きですので！！」

アカネも中学3年生だ。けれどもずっと面倒は見れることはない。俺が高3になれば就活とかで遠いところに行くかもしれないから。

「このハンバーグ美味しいな」

「アカネの1からの手作りです。美味しいと言ってもらえて嬉しいです！！」

2年前とは違って、俺の家は義妹によってにぎやかとなった。

……アカネハウス2号は今でもアカネの部屋のどこかに置いてあるらしい。

2回表 義妹（後書き）

京介「俺とアカネの話か」

作者「まあ、一応設定とかあるからね」

アカネ「リンさんはどうするんですか？」

作者「彼女候補じゃないが出すよ」

京介「アカネの親の話は？」

作者「出すとシリアスすぎるかもしれないんだよ。だから保留」

アカネ「そういえばヘルガさんも出すんですか？」

作者「出したら修羅場は確定だな。裏しか出てない人だけど頑張るかな」

京介「母さんってオリキャラ？パワポケ10とかの両親かと思ってた」

作者「オリキャラだ」

沙耶「私って出るのかしら？」

作者「俺の気分だ」

沙耶「そうなんですか？」

2回裏 喫茶（前書き）

全ての彼女候補を出す予定を少し変更します。

まず、彼女候補じゃなくて本名が出た人も出します（深草若葉や武内ミリーナなど）。

男性キャラクターも出来る限り出しますが、無理がある人は出ないかもしれません（レッドや渦木さんも厳しいかも）。

今回は芳槻桜空視点。

2回裏 喫茶

「桜空。もうやめようよ」

「お姉ちゃん！数学の点数を上げないと！」

「……………私も面倒くさい」

「維織さんも！！」

私達は喫茶店でお勉強をしています。今回のテストでお姉ちゃんが赤点。維織さんは勉強を面倒くさがって50前後だったので勉強会を開いた……………のはいいんですけど、

「准。パフェちょうだい」

「奈桜！さつきも頼んだでしょう！終わるまでお預けだよ」

「そんな」

お姉ちゃんと維織さんは勉強をしないから正直、お手上げです……………。准さんはこの喫茶店でバイトをしています。准さんの数学のテストは78点でした。

「……………赤点を取らなきゃいい」

「そうですよ。だから准。モンブランくださいな」

「お姉ちゃんは赤点でしょ！？」

「赤点だとバイトも出来ないんだからね？」

夏目准さんと野崎維織さん。中学校で知り合ってから私達はだいたいの4人で行動している。准さんは可愛いものが大好きだけど、たまに黒い？女の子。維織さんはやる気ないが代名詞の女の子。

「……………桜空に馬鹿にされた気がする」

「…………奇遇ですね。私も何か…………」

そして、私のお姉ちゃんの高科奈桜。スクープ大好きで何かとトラブルを起こす女の子。名字が違うのは……………いろいろあったということです。

「奈桜。このままだと本当に留年しちゃうよ?」

「…………桜空のほうが学年が上」

「それは嫌ですね。でも効率的に勉強ってどうやってやるんでしょう?」

効率的に勉強をやるのなら、授業中にノートを取って家で勉強するのが1番ですけど…………、

「カンニングの練習?」

「…………まず勉強じゃない」

「一夜漬け?」

「お姉ちゃん、途中で飽きて寝ちゃったよね?」

「解答用紙のすり替え?」

「勉強じゃないし、人として最悪の行為だよ。そもそも誰とすり替えるの?」

「……………京介君?」

「ダメだよ!そしたら黒崎君がかわいそうだよ!」

お姉ちゃんったら…………。

「桜空ってわかりやすいね。京介君のことになるとすぐ慌てるからね」

「っ!」

「黒崎君は人気あるから、桜空も負けないうに頑張って」

「私は……」

「……好きなんでしょう？黒崎君のこと」

お姉ちゃんも、准さんがクスクス笑ってからかってる……！……確か
に好きだけれど……。

「黒崎君には梨子さんが……」

黒崎君と梨子さんは本当に仲が良い。幼なじみで黒崎君も一緒にい
ると楽しそうだったから……。

「恋に遠慮はいらないわよ！確かに梨子は黒崎君と仲が良いけど、
桜空だつて負けてないからね」

「准さん！周りの客が見てますよー！！」

うわぁ……恥ずかしいなあ。皆に聞かれちゃったよ。

「夏目！お前バイトだろ？そんなにうるさくしてていいのか？」

「あれっ？黒崎君いたの？」

黒崎君！？どどうしよう！？今の聞かれてたら顔も合わせられな
いよ……！！

「優輝と入って来ただろうが。案内してくれたのは別の人だったけ
ど」

「……桜空？」

「わ！？ひゃい！？」

「……落ち着けよ。お前が1番声でかいぞ」

聞かれてはいないみたいだけど、黒崎君が目の前に！？期待して准

さんとか黒い笑いをしてるよ！

「…さっきの話は聞こえてましたか？」

「いや？何か黒崎君って聞こえたからこっち来た」

良かった……。聞こえてたらダッシュでこの喫茶店から逃げよう
と思いましたよ……。

「まあまあ座つてよ京介君！立ち話もなんですよ？」

「でも優輝が……」

「あたしが呼んでくるから大丈夫だって!!」

「そうか？なら失礼しようかな」

ええ！？ここに座るの！？私の隣なのに！？

「桜空。隣に座るがいいかな？ダメならそっちの2人席に座るから
いいけど」

「い、いいえ！大丈夫です！！どうぞ隣にお座りください！！」

言葉遣い変だよ……。！何やってるんだろう私！！もつと黒崎君と
仲良くならないと！

「……………私、ちょっとトイレ」

「えっ？」

維織さんが席を立っているのは私と黒崎君だけ。お姉ちゃん！狙っ
てやったの！？

「ん？勉強してたのか？」

「は…はい。でも一向に進まなくて困ってるんです」

「高科か？」

「維織さんもですけど、2人ともやる気がなくて……」

そつえば黒崎は頭がいいんだった。どついう勉強方法か参考にしようかな。

「高科には物で釣つたほうがいいんじゃないか？」

「えっ？」

「アイツはネタが好きだから、それで釣るのもいいと思うぞ？」

その時に私が思いついたのは私にとって……梨子さんも聞きたいことかもしれない。

「じゃあ、黒崎君のす……好きな人を……聞いてもいいですか！？」

言つてしまった。返つてくる答えによれば私の初恋は終わつちやう。

「俺の好きな人で高科を釣るのか？」

「だ……だつて皆が知リたがつてゐるから……」

「俺には好きな人はいない」

返事は曖昧なものだつた。きつとこつ返つてくると思つていたけれど、ほつとしてゐる。

「野球一筋だつたからな。恋とか全然わからないだよ」

「それはですね……その人とずつと一緒にいたいなあつて感じになることですよ」

恥ずかしいこと言つたなあ。でも！私の本音でもあるんです！中学の頃に私を救つてくれたのは黒崎君でしたから……。

「そんなこと言ったら俺は……優輝だって、アカネだって、梨子だって、桜空だって好きになるな」

「えっ？」

「クラスのやつらと同じでずっと一緒にいたい。そんな最高のメンバーの集まりだからかな」

黒崎君は笑った。その純粋な笑顔は本当にかっこよかった。私達のクラスは良く問題を起こすことで知られているけど、黒崎君も自分から巻き込まれて楽しそうだった。私もお姉ちゃん、准さん、維織さんが好き。中学の頃には考えられなかったことだから凄く嬉しい。

「私も……」

「京介！1人にしないでよ！」

「豆柴！いいところだったのに」

雨崎君とお姉ちゃんがこっちに来る。今になって「私も……」の後の言葉を言わなくて良かったと思う。雨崎君のあだ名は豆柴だけど、理由は不明です。

「あれ？芳槻さん？」

「こんにちは。雨崎君」

「悪いな優輝。テストの話で盛り上がってな」

「そうなんだ？でも俺と高科だけで何か気まずかったじゃないか！」

「お、そうだ。桜空と高科は海行く？梨子に誘われてるんだ」

海！？物凄く行きたいけれど……。

「ごめんなさい。夏は実家に帰らないと行けないので……」

「そうか……じゃあ今日はそろそろ帰るな。アカネにも言っとかな

いと」

「じゃあねー京介君、豆柴」

「豆柴はやめてよー！何か恥ずかしいじゃないか」

雨崎君と黒崎君は雑談をしながら店を出ていった。その後、タイミングよく維織さんが戻ってきて、タイミングよく准さんが今日の仕事が終わったらしく、制服姿で戻ってきた。

「……もしかして黒崎君を呼んで座らせたのは、お姉ちゃん達の作業ですか？」

准さんや、維織さんが目を合わせて何かを相談した後、

「……偶然だよ」「」

「絶対嘘じゃありませんか！？」

お姉ちゃんただけだけど、顔が引きつってる！准さんは目をそらして黒い笑みを浮かべているし、維織さんは……いつも通りだった。

「豆柴が予想以上に豆柴でした。ナオっち、一生の不覚です……」

「マスタードパンで足止めすればよかったかな？」

准さんのマスタードパンって言ったら……！！

「あれはパンがマスタードにサンドされているのですが、どうやって作るんでしょう？」

「……食べてみたい」

「維織さん！？絶対に後悔しますよ！！」

食べた皆が倒れた恐怖のマスタードパン。電視さんが何回か来て何回もマスタードに沈んでいるので、もう見たくない。

「あれ？今日はキーボードは来てないね？」

「電視？アイツに毎回来られたらこっちが保たないよ……………」

その直後に、店の入口の約100メートル位先から「ドドドド」という音が聞こえたらしい。准さんの耳は何を感知したんだろう？

「キイイイイボオオオオドオオオオオ！！！」

「あれ？電視さん？」

「我が神が僕の名前を呼んだ気がする！！！」

電視炎斬さん。准さんの追っかけで我が神と呼んでいる変わった人何かと発狂しているからクラスの皆は相変わらず白い目で見ている。

「……………准ならさつき家に帰った」

「そうですか！！ありがとうございます野崎さん！！！」

電視さんは敬礼をして、キイイイイボオオオオドオオオオオと言って店の人全員に「なんだあいつ？」みたいな目で見ていた。

「准！もう大丈夫だよ」

「……………いつかマスタードパンより凶悪なもの作ってやる」

「……………恐ろしい」

この喫茶店には准さん目当てで来てる人も少なくないみたい。ここは親切高校に近くて私のクラスの人達も何人も通っている。安くて品揃えも良いから黒崎君も利用している。

「准君。君のおかげで客も増えてね。これからも頑張ってくれるかい？」

「はい！世納店長！！」

世納店長。ここの喫茶店の店長で気前のいいダンディーな人。コーヒーに熱いこだわりを持っていて新作のコーヒーは欠かさずにチェックしている。

「世納さん。この間の新作コーヒー美味しかったです！」

「高科君、いつも飲んで感想を書いてくれてありがとう。早速 Ньюにしようと思ってるんだ」

「絶対！流行りますよ！！」

お姉ちゃんは世納さんと仲が良くて毎回、新作コーヒーが出た日はじつくり味見している。私もコーヒーは嫌いじゃないけれど、苦いのが少しダメなので砂糖やミルクがどうしても多くなるので……。

「……………私もお気に入りに」 「維織さんも気に入ってくれたかい？それはよかった」

今日の喫茶店はいつも以上に騒がしかった。

「桜空ちゃん！」

「あれ、いつき？」

桜井いつき。私達の幼なじみで、私達を追っかけるために親切高校に入学したみたい。

「姐御。ひどいですよ。せつかく同じ高校になったんだから一緒に帰りましようよ」

「あ、そういえばいつきって同じ高校だったたね！」

でもお姉ちゃんはずいぶん冷たい。学年は1つ下だけれどよく私達の教室に遊びに来ている。なぜか黒崎君に敵対心を抱いているみたいで会うたびに殴り掛かるけど、受け流している。

「黒崎に会ってから姐御は冷たくなった気がする……」

「いつきは何で京介君が嫌いなのか」「桜空ちゃんを惑わす悪魔だからですよ！」

「……ちよつと今のは」

「あたしも聞き捨てならないこと聞いたな」

「え？姐御？桜空ちゃん？」

お姉ちゃんと目が合う。「やるよ！」と言っている目だった。

「いつき？あそこに使われてないビルがあるから行こうか（行きますか）？」

「ひっ！？笑顔が怖いですよ！！このままじゃ、地獄を見ます！！」

地獄？いつきは何を考えてるんでしょう？

「いつき？今から見るのは」

「地獄より酷いことよ？」

「（ガクガクブルブル）」

いつもは静かだった廃墟のビルは誰かの叫び声で少しうるさかった。

2 回裏 喫茶（後書き）

維織「……………私も学生？」

作者「ああ、人気キャラはだいたい京介のクラスメートだ」

准「作者さん？何か最初らへんに私を同級生にするのは無理とか言
ってなかった？」

作者「それは京介が言っただ」

京介「はあ！？お前が喋らせたんだろ！？」

作者「まあ、正直俺はこのパワポケの世界観を操れる超能力みたい
なものだからな」

ホンフー「（コピーしたい……………）」

京介「あれ？ホンフーさん？」

ホンフー「私達って同級生で出るんですか？」

作者「アホか。無理に決まってるだろ」

准「エアレイドとかどうするのさ？」

エアレイド「まず姿が見えないのでは……………」

作者「そこから先はネタバレだからダメ!!」

幸太「店長というよりマスターなんだが、訂正してくれないか？」

作者「気にしちゃダメ」

京介「つか、ナンバーの方々は登場無理だろ」

ジナイダ「何!？」

京介「どっから出てきた!？」

ジナイダ「さつきからずっといたのだが」

エアレイド「喋らないといるかどうかわかりませんよ？私は小説だからいるのがわかりますが」

作者「番外編だから夢の共演してんな……まあ、皆出すから安心してくれ」

3 回表 神桜（前書き）

無理設定ありすぎ（笑）

って感じで見てもらえると助かります。頑張れば全部のキャラクタ
ーだせるんじゃない？とか思ってたけどシズヤとかジンとかどうす
ればいいんだ！？

今回、黒崎の能力が発揮されます。

3 回表 神桜

神桜高校。いわゆるお嬢様学校であり、親切高校と同様に、神桜小学校から神桜高校まであったのだが、ある高校に吸収され分校という形で存在している。もちろんだいたいの方は神桜分校へ行っただが、ある高校によって行動を監視されるので、厳しい現状である。それを打開するために、他の高校に逃れる人もいるらしい。

「混黒高校？」

「うん。新しく出来たマンモス高校の頂点で、強くなっているらしいよ」

優輝が俺に見せてきたのは混黒高校のパンフレットだった。マンモス高校なんて珍しいな～と思っていた。

「ん？これって……」

「京介！今度見に行かないか？」

分校のリストを見ると、

海底分校

開拓分校

神桜分校

とあった。引つ掛かったのは神桜分校だった。親切高校と同じシステムだったので覚えている。そして神桜中を出身してきた人に知り合いがいた。

「混黒高校ね……………」

「京介？」

「行かないほうがいいな。悪い噂も多いからな」

神桜のことについて聞きたいことがあるので聞くことにしよう。

「用事出来た。今日は昼休みにバスケットできないや」

「突然どうしたの？まあ、用事なら仕方ないよな」

優輝と別れて神桜中出身の人に話を聞くかな……。

「浅井！ちょっと話があるんだが」

「あれ？黒崎さん。ごめんね、桜華。先に行つてて」

浅井漣。いたって普通の女子だ。コンピュータにやたらと詳しいことを除けば普通の人だよ。うん。

「あのさ、神桜について聞きたいんだけど……」

「いいですけど、長くなります」

「大丈夫だ」

神桜高校は俺と同じクラスの一ノ宮桜華のお父さんが理事長だったが、亡くなり混黒高校に吸収されたみたいだった。一ノ宮は記者の武内さんと組んだり、ツナミで情報を探したりと忙しいらしい。目標は神桜の独立であり、そうすれば後輩が安心して神桜高校に入るようになる。

「なるほどな……」

「私も頑張ってるんですが、桜華みたいにお金がないので……」

混黒高校の悪い噂は分校への悪質な行為もあった。

「……俺もなんか手伝えることはないか？」

「えっ？黒崎さん！いいんですか!？」

「俺もやれることをやってみる」

「ありがとうございます!!」

浅井に手を握られる。うつ………何だか恥ずかしいな。

「おい……恥ずかしいんだが……」

「あつ、すみません。桜華に相談してきますね」

神桜中出身は浅井と一ノ宮以外に2人位いたような気がした。えーと、天月と南雲だったかな……。

「黒崎、話は聞かせてもらいましたわ。でも神桜出身じゃないかたがどうしてお手伝いをされるんです？」

「混黒高校は悪い噂があるんでな、そいつを確認するためだ」

部活に打ち込んでいる学校と言うのは素晴らしいと思うし、混黒高校は勉強も力を入れているみたいだ。………だけど、他の分校への悪質な行為は許せない。

「……………あなたが混黒高校の内部の人間であることはありませんか？」

「それはないな。だったら混黒高校をボコボコにしねえよ」

混黒高校に8対3で勝って野球部の奴らは叱られてたな。まあ、睨まれたのは俺だけじゃなく優輝もだったけど。

「確かに混黒は勝敗に厳しいですからね」

「それと裏切ったらこれを校長に提出してもいい」

そう言っただけ俺は内ポケットから一ノ宮に渡した。

「退学届……………」

「一ノ宮が持つててくれ。いざとなったら切り捨ててもいい。俺の覚悟は伝わったか？」

「……………ええ。あなたなら信用できそうですわ」

一ノ宮と浅井は喜んでくれたが、もう1つ理由はあった。それは混黒高校にいるあの人のことだ。校長に苦しめられてるんだ。俺の尊敬している人を助けたい。

「……………ていうか浅井。海に行っただけいいのか？一ノ宮が忙しいとか言っただけだろう？」

「夏休みは自由なので大丈夫ですよ。黒崎さんも海に行くんですね」

浅井は楽しそうにしているが、隣の一ノ宮は「むー」という感じの難しい顔をしている。

「一ノ宮。気分転換しないといい考えつてのは浮かんでこないんだぜ？」

「そうだよ。桜華は思い詰めすぎだよ？」

一ノ宮と浅井と仲が良いみたいだけど一ノ宮が浅井のリズムに飲み込まれてるように見える。

「私も海に行きたいのですが……………」

「桜華も来る！？」

「交際していない殿方に肌を露出するのは抵抗があるんですわ！」

殿方って……………珍しい言い方するな。さすがお嬢様と言ったところかな？

「別にいいと思うのに……………。それに海には一般人がいるから見られちゃうよ？」

「う……………確かにそうですわね」

海に行くメンバーは俺、越後、優輝、チハ、梨子、アカネ、霧生、浅井の8人になったんだけど、1泊2日。つまり泊まりということなので女子は少し抵抗があるかもしれない。メンバーがメンバーだから抵抗どころか夜中に枕を投げてきそうだ。

「他にも神桜出身はいなかったか？」

「いますけど……………」

お嬢様学校となれば親が大企業の人とかじゃないのかな？なら、スポンサーやら資金も確保できるんじゃないか？

「家庭事情で参加してないんです。すみませんが黒崎さんにはお教えできないんです」

「いや、大丈夫だ」

他の2人は家庭事情があるなら仕方ない。

「俺達3人で神桜を独立させよう」

「おー！」

「お…おーですわ！」

昼休みは終了間際。解散となり放課後に武内さんを紹介してくれるようだ。

「部活があー！？」

忘れてた！！そっいえば部活あるんだった！！コーチに無断欠席するとまた外周が……………！！

「ワタシは武内ミーナと申します。よろしく黒崎さん」

「よろしく。武内さん」

少し小柄なお姉さんだった。俺の想像なら普通におばさんとかだと思ってたから意外だ。

「黒崎さんの覚悟は知ってます。しかし混黒高校は手段を選ばないです」

「えっ？それって？」

「実力行使。直接危害を加えてくるってことだろ？」

「はい。ワタシの仲間も危ないところでした」

わかっていたが、ここまで救いようがないのか？

「何をされたんだ？」

「車でひかれそうになったそうです……。幸い軽症でしたが……」

「……………」

浅井と一ノ宮が驚いている。車でひくなんて行動は個人的な行動じゃなく、上からの命令だろうな。

「今日は混黒高校に潜入しますが、黒崎さん。あなたはどうしますか？」

「勿論行くさ。楽しそうだ」

これは思った以上に楽しいことになりそうだ。修羅場をむかえそうだな。

「あの！？楽しそうって……………！！命が懸かってるんだよ！？」

「そうですわ！？」

「いいこと教えてやる。1回死にかけた人ってのは命を軽く見ちゃ

うんだよ。特に自分の命がな」

昔、俺は1人で夜の道を歩いていたら銃撃戦に巻き込まれた。俺はその時に死んだと思った。突然俺を盾にして銃撃戦を続けた。その時に俺は泣くこともできなかった。そして、ある人が俺を助けてくれたんだ。

「黒崎さん……………」

「黒崎。無事に戻って来なさい」

「わかってるって。少しは俺を信用しな。あ、死んだら退学届出し
といて」

その助けてくれた人はホンフーと名乗った。俺の尊敬する人の1人
なんだけど。その後も何回か会いに来てくれた。ホンフーさんは俺
が正常が調べに来たらしい。1人っ子の俺にとってはまるでお姉さ
んのようなだった。……………実は男だと知ったら凄くびっくりした。超
能力を見せてくれたけど、本物だった。「ドウムチェンジ ダー
クスピア」と言っていたのは謎だったが天井に立っているなんてな。

「では黒崎さん。行きましょう」

「了解。浅井！コーチに『黒崎君は他校の偵察に行きました』って
伝えて」

武内さんの車に乗り混黒高校に向かう。今からやることは命懸け（
笑）だから注意しないとな。

「黒崎さん。あなたのことは一応調べておきました。変わった能力
をお持ちで」

「便利だぜ？」

小学生の頃に気付いた。俺には驚異的なバランス感覚があることに。一輪車や平均台は余裕だった。そのうちに他の人の体重の掛け方も地面に足をついてるだけでわかるようになった。

「しかし、黒崎さんも変わってますね。引き受けた人は黒崎さんを入れて3人です」

「後、2人か」

きつとプロっぽい人が来るんだろうな。そう思っていた矢先、

「どうぞお乗りください」

「失礼しますよ」

「……………フン」

……………凄い気まずい。プロっぽいというより暗殺者みたいなのがいるんだけど。1人は眼鏡かけてて警察官みたいな人と、もう1人はワイルドな感じで青い服と青い帽子っぽいのを着た人。正直、隠密行動に向いてなさそう。

「ミーナさん。1人未成年がいますが……………」

「ワタシが直々スカウトに行きました。潜入に関していい能力を持っているです」

「やっぱり最初から俺狙いかよ。素直に言ってもついてきたぞ?」

「おや?ばれてましたか」

話の流れで俺にスカウトしたのは確かにいいが、浅井や一ノ宮よりも俺を的確に絞ってスカウトしてるのはバレバレだ。

「このガキが本当に役に立つのか?まあ、俺は金が貰えるなら何でもいいけどよ」

「悪かったなガキで。俺は黒崎京介だ」

「……………フン。椿だ」

「私は渦木と申します」

外を見れば木が生い茂っている。そろそろ混黒高校かな〜と考えていると隣の椿さんが武器を持ち始めた。

「いや、早すぎだろ」

「馬鹿か！ガキ！油断してれば一瞬で狩られるんだからな！！」

うつわ〜！怒鳴られちゃったよ。隠密行動を前にこれでいいのかよ？

「難所は見張りのロボットに赤外線の通路に迫り来る爆破型ロボット、3重ロックですね」

「見張りのロボットは俺に任せる。ライフルで停止させる」

おい！？そのライフルどこから出てきた！？まるでドラ もんのポケットみたいに出てきたぞ！？

「では、椿さんが撃つたらあそこまで走り抜けましょう」

椿さんがライフルを持つその時の顔はさっきまでの顔とは違い、仕事人のようだった。

ガンッ！！プシュー……………

とロボットの回路が壊れたことによるショートだろう。これを狙ったなら椿さんは凄い人だと思う。

「今のうちです！！」

「おう!!」

混黒高校の内部はやはり他の学校とは比べものにならないくらい金を注ぎ込んでいた。

「赤外線の通路はどうでしょう?」

「黒崎さん。これを」

そう言っただけで渡してきたのは赤外線ゴーグルだった。……まあ、言いたいことはわかるぞ? 渡れただことだよな?

「武内さん。下手したら失敗するかも」

「その時は退散しましょう。椿さんが車で待機してますので」

赤外線ゴーグルを被り見てみると、赤い線が入り乱れているのがわかる。これを道具なしで切り抜けるのは容易じゃない。

「よっ………」

まず慎重に1歩目。ここから無理な態勢が連続で続く。横向きになったり、ジャンプして乗り越えたりした。汗をかいてくるが、それも赤外線に触れればアウト。恐らく檻みたいのが出てきて捕まるだろう。

「ん?ここは」

赤外線が何本も通り人間が通る隙間も厳しい。ここを抜けたら俺の仕事は終了かな?

「ぐっ………」

「あの態勢で……。彼のバランス感覚はどうなってるんです？」
「地軸を読み取る力と言いますか、足が地についているだけで誰かの重心のかけかたとかがわかるそうです」

よっしゃああああ！！通ったぜえええ！！赤外線の解除ボタンを押し、武内さんと渦木さんを通す。ここから研究施設つばいところに行くみたいだ。

カサカサカサ……、

と嫌な音がした。武内さんのライトで照らすと、

「蜘蛛！？」

「いいえ！あれは爆破型のロボットです！近づかれるとドッカーンですよ！！」

数は3桁いくかいかないかの量だった。勿論、椿さんみたいに武器は持っていないし、素手でやったら勿論ドッカーンだよ。

パンッ！

といい響きと共に硝煙の匂いもしてきた。今のは渦木さんが撃ったのかな？

「1発じゃ壊れません。武内さん、射撃経験はありますか？」

「いいえ、基本的に護身術なので」

この数相手に1人じゃ厳しいな。どこかのゲームと違いワンタッチでリロードできるわけじゃないからな。

「1回引き上げましょう。予想以上に警備が厳しいですね」

「次はもつと厳しくなるんじゃないか？」

「それなら応援を呼びます。こういうのが得意な知り合いがいますね」

今日の潜入は終了。楽しかったけれど再深部まで行けなかったのは悔しい。

「今日はご苦労様です。黒崎さんも」

「次は見張り以外の仕事をしてえな」

「しかし、ここまで厳しいとなると……怪しいですね」

別に分校への嫌がらせはそこまで隠す必要はない。恐らく混黒高校の重要な秘密かもしれないな。

「こういう警備を破るプロに心当たりがあるんだけど、次に呼んでいいか？」

「黒崎さんの知り合いにそんな人いるんですか？」

超能力持っている時点でどんな警備も破れそうだけどな。

「念のためにもう1人呼んでおきましょう」

解散したのは8時だった。家に帰ってアカネに心配され、チハに部活に来なかったを聞かれ、梨子になぜか空き缶を投げられ、部活が地獄になったのは言うまでもない。

3 回表 神桜（後書き）

作者「お前ら後書きだからって夢の共演するな」

ジナイダ「なぜだ!？」

グントラム「後書きしか出れないかもしれないんだろ!？」

エアレイド「私なんて霊体なんですよ!？」

ホンフー「私は登場するみたいですね」

京介「知り合い設定かよ」

作者「だってホンフーさんは13も14も目立っていただろ」

ジナイダ「ジナイダも負けないゾ？」

カリオペ「自分は？まず本編で未登場なんだけど」

作者「続編とかで出てきたら出すよ」

洗谷「私は一般人として出されても違和感ないんじゃないか？」

作者「確かに。でもそれでいいのかよ？マゼンタは厳しいな」

マゼンタ「なぜ？」

作者「あの格好をどうにかしろ」

犬井「……………帰る」

ルチア「るちあは？」

作者「出るんじゃないか？つーか女は全員出すかも」

ジナイダ「ならジナイダもだな！」

エアレイド「なら私も！」

カリオペ「（まず性別すら不明なのに……………）」

3回裏 平和（前書き）

あくまでもオリジナルのお話です！！

ここおかしいとかあると思いますが、キャラクターを全員出すのは難しいです。

天月五十鈴と娘の沙也香をどのように出すかとか、特にパカーディを出すタイミングが掴めない！！

今回は、ウ・ホンフー視点です。

3 回裏 平和

少年を助けたのは気まぐれだった。銃撃戦に巻き込まれた少年の表情は、悲しみ、悔やみ、絶望ではなく、無表情だったの。みたところ小学生の3、4年生の子どもなのに、泣きもしなかったなんて珍しい子だと思っていた。

「大丈夫？」

「……………うん」

無表情の少年は力なく頷いた。銃弾がかすって血が流れているのに……………。無視できないわよね？

「お家はどこ？」

「……………あっち」

「私が送ってあげるわ」

少年の手を握ると震えていて私から離れようとしなかった。

「着いた」

「あら？ここなの？」

「うん」

少年は鍵を出して自分で玄関の扉を開けた。私が帰ろうとすると……………、

「ダメッ！！帰らないで！！」

「……………あの？私も家に入るの？」

「うん……………」

少年が潤んだ目でこっちを見てくる。小学生の頼みだから聞くしかないわね…………。

「わかったわ。…………でも寝たら勝手に帰るわよ？」

「やったあー!!」

はしゃぐ少年はさっきまでの顔とは違い笑顔だった。そして「わーい！」と言って抱きついてきた。

「ちょ、ちょっとお!？」

「父さんも母さんもいなくて淋しくて怖かったの!家に1人が淋しいの!」

「…………」

少年は泣きながら言ってきた。親も親だ。なぜか弱い子供を1人暮らしにするのか？

「僕は黒崎京介です!」

「私はホンフーでいいわよ」

「よろしく!ホンフーさん入って入って!!」

黒崎君に手をひかれて家に入る。小学生1人だけ住んでいる家にしてはきつちりしていて、ゴミの分別、部屋の掃除も行き届いていた。

「まず、手当てしましょうね?傷口見せて」

「うん!」

傷口の手当ての後、話をしてくれた。黒崎君は甘えん坊かと思っていたけれど、幼稚園の頃に両親に甘く育てられ、人に甘えたい時期

に親がどちらも外国暮らし。私に甘えられてもねえ……。

「黒崎君？」

「……………スー」

「寝てますか？では、私は帰るとしましょうか」

黒崎君、もう会うことはないかもしれませんが、お元気で。久しぶりに家族の気分を味わいました。

「ある人の調査ですか？」「うん。超能力者でもなく、サイボーグでもないのに便利な能力を持っているんだよね」
「その仕事を私が？」

仕事の話だけれど気が進まないのよね。私の超能力でコピー出来るかもわからないのに。普通の人間の能力をコピー出来るのかしら？

「個人情報はこちらに置いとくから」

「はあ……」

個人情報を手に取り、中身を開く。名前は……………、

「黒崎……………京介!？」

「知り合いかい？」

「ええ、まあ」

まさかあの時に助けた少年がそんな力を？

「ちょうどいい。その子と接触してくれ」

「えっ？」

「その子の信頼を得てくれ。その能力はボクも見てみたいんだ」

その気になれば、フランススの超能力で連れてくることも出来るし、ジナイダに頼めばやってくれるだろう。

「その仕事の担当は私だけでやらせてもらっわ」

「うん？念のためにルチアくんにも来てもらおうと」

「その必要はないですよ？」

ただ1回会っただけなのに、その子を守ろうとしていた。理由もわからないままだったけれど、助けたのも気まぐれではなかったということなのかも。

「珍しいわね？ホンフーが普通の子供の調査を真面目にやるなんて？」

「あら？エアレイドさん。いらしたんですか？」

「私も会ってみたいな。黒崎って人にさ」

……エアレイドさんは個人行動はせず、ジオットさんの護衛をやるはずなんですがね……。

「私のお目付け役ですか？」

「まあそれは秘密よ」

小さい子供にナンバー2とナンバー3が出向くのもおかしいと思いますけどねえ…………。

「別に構いませんが、姿は消していてください」
「わかってますよ」

日曜日の商店街に黒崎君がいるみたい。ピンクさんをお願い？して調べてもらいましたわ。

「あの子ですね」
「あの子供ですか？普通の男の子ですね」

先回りして黒崎君の視界に入るように立つ。すると黒崎君は私に気付いたのか目を見開いている。

「お久し「ホンフーさーん！！」ぶつて、ちょっとお！？」

黒崎君は私に向かって走ってきて飛び付いてきた。街中なので勿論、通行人＋エアレイドさんに見られる。

「あの……………恥ずかしいんですけど」
「ホンフーさん！また家に遊びに来てよ！」
「黒崎君！手を引っ張らないでください！！」

黒崎君は無邪気な笑顔でまた家に手を繋いで行くことになった。

「あれ？私、邪魔です？」

エアレイドさんはしっかりと見てみたいだった。

「最近、変わったことある？」

「んーとね？バランス感覚が凄く良くなったんだよ！！」

黒崎君は目をつぶり片足で椅子の上に乗った。ブレることはなかったけれど、バランス感覚だけでジOTTさんが興味を示すことはない。何かしらの影響でバランス感覚が強化されてるだけだということってどこかしら？

「凄いわね？それなら一輪車とか楽々でしょう？」

「うん！スポーツが凄く出来るようになったんだ！」

運動神経の強化は能力ではないのであり得ない。自分の意志で身体
のあらゆる器官を強化するなら別。しかし、それではバランス感覚
の説明がつかない。バランス感覚はすなわち重心の制御。重心は身
体強化でどうにかなる以前に逆におかしくなる。黒崎君の能力は…
……？

「ホンフーさん！何かしようよ？」

「いいわよ？何をするのかしら？」

「キャッチボール！！」

外の庭でキャッチボール。黒崎君の身体能力を測るいい機会だわ。

「えいつー!!」

何球かキャッチボールしてるけれど、変わった様子はない。私が誰かと楽しくキャッチボールをしてるのが1番変わってるわよね………。

「おっと……」

しまった。考え事してたらコースが!? 黒崎君は壁に向かって走っていて気付いていないみたいだし………!

「黒崎君! 壁!」

「よしっ!!………え? わっ!」

私は黒崎君が壁にぶつかると思った。………けど、ボールをキャッチした後、壁を蹴り空中逆回転をして着地した。

「………! 見た!? 僕今、バック転したよ!」

「………ええ、凄いわ黒崎君!」

「(今のは明らかにバランス感覚の問題じゃないわ。体操選手並の運動神経ね)」

あ、エアレイドさんいたんですか? てつきり黒崎君の家に入ってから気配が無くなったと思ったんですがね?

「あれ? 家に誰がいる?」

「え? なんでそんなことわかるの?」

私も泥棒らしき人がいる気配を感じましたが、黒崎君が気付くほど大きな音はなかったはずです。………能力、でしょうか?

「私が調べてきます。黒崎君はそこでじっとしててください」
「うん」

リビングには誰もいない。玄関から入ったなら………場所的に黒崎君の部屋にいそうですね？部屋に近づけば近づくほど、物盗りの音が大きくなってきました。

「誰です？」

「ぐっ！？そこをどけー！」

「私の知り合いの物盗りはやめてくださいよ」

「くそっー！！」

ナイフごときで私を倒せると思っっているんですかね？甘く見られたものですよ。

「ホンフーさん！！危ない！！」

「っ！？黒崎君！？」

何ということだ。黒崎君が私を助けようとしているのだ。私は超能力者だ。マフィアが100人いたって負けない。超能力抜きでも25人は相手できる。………でもこの子を守りながらは厳しい。あの時の過ちのことを思い出してしまふ。黒崎君を助けた時からそうだったのかもしれない。この子は私の大事な人とよく似ていて………。

「ぐっ！？ぐわあああ！？」

「世話が焼けますね。取り敢えず生かしますか」

エアレイドさん。助けられてありがとうございます。そう言いたいけど黒崎君に勿論、霊体の気配を感じ取るのは無理だから。黙っ

ておこっ。

「無事、ですか？」

「……うん。グスッ」

「ほら、男の子が泣いちゃダメですよ？怖かったのはわかりますが」

「ホンフーさんがいなくなったら………また1人ぼっちだもん………」

……」

返す言葉がない。この子にとっては私という人間はどういう風に映っているんだろうか？どう思っているだろうと………私は悪人なのだ。超能力者をたくさん生み出し『あの超能力』が出るまでは、私は諦めない。そのためにたくさんの人が犠牲になっているのに、それを使い捨ての道具の様にしている私は紛れもなく………悪党だ。

「（私は何でこんな超能力者と子供の平和な劇を見ているのでしょうか？少し和みました）」

「ほらほら、私は無事だから。シャキーンとしなさい！」

「………うん！」

この後に警察を呼び犯人を引き取ってもらいました。黒崎君は「今日も一緒に居てよ！」と言われましたが、仕事があるということので1日が終わりました。

「どうしたんだ？ ホンフーらしくないゾ？」

「ジナイダですか？ 今の仕事ですよ」

「子供のお守り役か？」

「そうです。会ったのが昨日で4回目でした」

会ったたびにバランス感覚（黒崎君はそう思ってるだけ）が成長している。私が家の近くに来ているのがわかったらしい。4回目では、他の人の重心のかけ方までわかるとか言っていました。まだ能力が何なのかわかりません。

「私も……平和ボケでしょうかね？」

「ジナイダも家族の一員として働いているが……家族というのも悪くないゾ？」

「家族ですか……。それは昔に置いてきたと思っていましたよ」

私にも平和というのがあっていいんですかね？ また昔みたいなことがあるかもしれない。……その時は私が守ればいいんだ。今の私は負けない。

「しかし、黒崎という男も運がないな。普通の人間ならジナイダ達と関わることはなかった」

「私と黒崎君は仕事の前に一度会っているんです」

「何かあったのか？」

「銃撃戦に巻き込まれていたんですよ」

「ジャジメントか？」

「それはわかりませんね。一瞬で殺っちゃいましたから」

5回目の仕事だ。心の奥底では楽しみに思っているのでしょうか？

……ちなみに友人としてジナイダも来ています。

「ジナイダ？本当に会うんですか？」

「ホンフーの友人ということなら納得してくれると言ったのはホンフーだゾ？」

呼び鈴を鳴らす黒崎君はドタドタと走ってきたけれど、

「あれ？ホンフーさん？とどちら様ですか？」

「私の友人もお連れいたしました」

「？なぜ扉を開ける前に2人いるのがわかるのだ？」

「そういう能力なんです」

扉が開く最初の笑顔が一転し、ジナイダを見ると頭に？マークをいっぱい浮かべてるみたいだった。

「えっ………」と

「ジナイダだ。ホンフーの友人だ」

「黒崎京介です。よろしく！」

「ん？何だこの手は？」

黒崎君はジナイダに握手をしようとしている。ジナイダに黒崎君は怯んでないですね。

「ジナイダ、握手ですよ。手と手を握り合うことですよ」

「……これも平和というやつか？」

「………そうですね」

黒崎君と会ったのですが、悪党でも平和というのがあっていいんですね。でも、これから黒崎君はジオットさんに会わせないといけない。ジオットさんに気に入られれば平和と無縁の生活になるでしょ

う。……………黒崎君は私がいなくなる平和な生活と、平和と無縁の生活。どちらを選ぶんでしょうか……………？

「ホンフーさんって男だったの!？」

「? 知らなかったのか？」

……………今が1番平和な気がします。

3 回裏 平和（後書き）

梨子、桜空、漣「「……………」」

京介「……………何だよ？」

梨子「京介って家じゃあんな感じなの？」

京介「ガキの頃だろ！？」

優輝「子どもの頃でも京介はクールだったよね？」

作者「そう責めるな。幼稚園の頃に甘く育てられて、小学生の頃に1人暮らしたぞ？」

桜空「ホンフーさんルートですよ？これ……………」

ホンフー「京介君はあの頃は可愛いかったわね」

漣「あれ！？いたんですか？」

ホンフー「泣き目で甘えてくる京介君はあれね！萌えって感じよ？」

京介「やめてくれ！！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！！」

作者「さすがツンデレ。普段はクール、ホンフーさんにはデレデレか？」

エアレイド「それはクーデレですよ？」

京介「デレてねえよ！！尊敬してんだよ！！」

桜空「ズルいです！私も泣き目で甘える黒崎君を見たいです！」

ホンフー「実はその時撮った写真が」

京介「うおおおい！？やめてくれホンフーさん！！」

ジナイダ「ホンフーが超能力を見せるシーンがないゾ？」

作者「この裏話は続きあるから」

ホンフー「だって一緒にお風呂……………」

京介「それはない！！勝手に捏造すんな！！」

作者「あつ、それいいな」

京介「うおおおい！？」

4 回表 水着（前書き）

話し方とか、性格とか、何か地味に違う気がするのですが、そこはスルーでお願いします。

今回は初の長話なので、区切りがおかしいです。

では、本編です。

4回表 水着

「海だっっ！！」

「海ですっっ！！」

「泳ぐぞっ！！」

はい。海に来ちゃいました。え？潜入の話？それなら夏休み明けになっちゃったんだよ。何でも夏休みだから警備が厳しいらしいんだとよ。で、終業式が終わってその次の日の朝っぱらが集合だったの
で、寝呆けているアカネを連れて電車へ。午前9時に海に着いて今に至るわけだけど、電車内は俺とチハ以外は全員寝てた。

「荷物置くから戻ってこい！！梨子！アカネ！！チハ！！！」

泊まりだから部屋も予約していて4人2部屋で過ごすことになった
(アカネは俺らの部屋になった。本人希望)。

「各自着替えてから、ここに集合だな」

「了解！」

男子の部屋に俺、優輝、越後、アカネが来て…………、

「おい、アカネ？お前はあっちだろ？」

「う、うん。俺もさすがにアカネちゃんにあっちだと思っ」

「俺でもわかるぜ？アカネは女子だろ？」

男子3名がまともなことを言った。優輝はとにかく越後がまともなことを言っただと？アカネは梨子に連れていかれて、ようやく着替えをすることが出来る。

「優輝ってあんまり筋肉ないのによくあんな球投げれるな？」

「京介だって4番なのに、そこまで筋肉ないでしょ？」

俺の場合は重心移動や、相手のピッチャーの投球が読めるようになったからな。打ち損じは基本的にないぜ？

「越後は……やっぱり筋トレしてんだ？」

「ん？当たり前だぜ！ヒットを打って4番に繋ぐのが俺の役目だからな！」

越後の長打で俺の番が回ってくるとだいたいチャンスが多い。敬遠されることもあるけど、越後の打撃にはお世話になっている。

「全員、トランクスか？」

「俺はこれしか知らないんだよ」

着替えが終わったので男子3人で集合場所で待つ。まだ誰も来ておらず、優輝は少しおどおどしながら、越後はあくびしながら待っていた。

「お待ちせす！」

「アカネちゃん！走らないで！」

はしゃいで走ってくるアカネとあわてて追う浅井が来た。アカネは普通の格好だったが、浅井はよくわからない格好をしていた。女子の水着はわかんないだよな……。

「浅井さんはワンピースかあ」

「「ワンピース？」」

おや？越後もわかってないようだった。

「えへへー。桜華から借りてきました！私には少し派手なような気がしますが」

「似合ってるんじゃないか？」

と俺が言ったら浅井の顔が赤くなり俯いてしまった。あれ？傷つくこと言っちゃったか！？

「あ…………あの」

「アカネはスルーですか！？」

「アカネも似合ってるぞ」

「…………京介って珍しい天然なのかな？」

アカネが「ワッ！」と言いながらビーチバレーのボールを持ってきた。

「ちょっと待てよ。ビーチバレーは泳いだ後にやるもんだ」

こう言いながらも女子の霧生夏菜。梨子の親友らしいのだが、性格が梨子に似てるが俺と同じくトラブルを処理する側である。昔は一緒にサッカーとかするほどアウトドア大好き女の子だった。今の趣味は料理らしい。

「こらゝ置いてくな！！」

「梨子さん！1人にしないでくださいよゝ！！」

続いて梨子が来て、チハが最後に来た。チハが来た時に優輝が目を逸らしたのはなぜだろうか？

「よっ！京介」

「よう、梨子」

「……………」

「水着につっこみなさいよー！！」

少しの沈黙の後になぜか梨子に怒鳴られてしまった！おかげで周りの人に見られたじゃないか！？つっこめと言われてもなあ。

「梨子。泳ぎやすそうな水着だな」

「うわっ！？凄い微妙なところつつこまれた！？水着だけじゃなくてあたしも含めてで！」

「ん？梨子とその水着似合ってるぞ」

色合いが合つてて俺はいいと思うんだけど。梨子の水着は薄い青色で浅井とは違って普通の水着だった。

「さすが京介！わかつてるね！」

「京介君！私のはどう？」

チハの水着と言われても……。少し肌の露出が多い気がするのはいのちのせいかな？……………というかそのせいで優輝が目を逸らしたんじゃないか！？

「チハ、似合ってるな」

「何か適当になってない？」

「……………京介？」

チハめ……。余計なことを言うなよ。断じて適当じゃないぞ？というか、女子に「似合う？」って聞かれて「似合わない」って答えれるかっ！！似合わない水着って何だよ！？どんなのだよ！？

「いや、俺の心からの本心（女子は皆水着が似合う考え）だ」
「黒崎？目が泳いでるぞ？」

霧生――！？今日は何で地雷発言を皆で言いまくるんだ！？

「……………まあ、京介に似合ってるって言われたから満足かな」
「そうですね……………」

何とか修羅場を乗り切ったようだった……………。梨子とチハが組み合わせさったら最強なんじゃないか？

「黒崎、泳がないのか？」
「まだいいや。霧生は？」
「私も泳ぎたいんだけど……………」

苦笑いしながら喋る霧生。アウトドア派でスポーツが大好きだから……………。と思っていたけど、

「泳げないのか？」
「ああ、もう！何でそんなストレートに言っただよ！」

霧生は少し拗ねた様子で梨子達の方を見ていた。優輝が追っかけられてるみたいだけど、何の遊びかな？鬼ごっこにしては随分と必死だ……………？

「あ、沈んだ」
「優輝。冥福を祈ってる」

その後、プカーと浮いてきた優輝には意識が朦朧としていたので、

避難させました。」

「泳ぎなら梨子に教えてもらったらどうだ？」

「そうしたんだけど、『やって慣れる』としか言わないんだ」

梨子のことだから、教えるより遊ぶことを優先しやがったな……
？チハも泳げるし、教え方も上手いはずだけど、

「チハと面識ある？」

「初対面だぞ？」

初対面じゃやりにくいよな。アカネはまず浮き輪使ってるし、浅井は少し慣れてないみたいだし、越後は……どうやって教えるんだ！？もしかして全部「俺についてこい」みたいな勢いとか！？こうなると俺と優輝だけになるけど……。

「俺が教えてやるか？」

「黒崎が？梨子に悪いよ」

霧生は何を遠慮しているんだろうか？確かに元々梨子に教えてもらうつもりだったみたいだけど……。

「いいっていいって。早く皆と泳ごうぜ？」

「……じゃあ、お願いしようかな」

霧生を海に連れてきたのはいいんだけど……。どこまで出来るんだろうか？

「水の中で目を開けるか？」

「それ位なら出来る」

俺と霧生は海に潜り目を開く。スポーツ万能の霧生には簡単らしく、水の中で親指をぐつと立てこっちを見てきた。

「なら後は泳ぎ方だな」

その時、後ろから歓声があがり俺と霧生は振り向く。そこには梨子とチハがビーチバレーで争っているみたいだが……………？

「気にしたら負けだ。クロールの練習するか？」

「ああ、そうだな」

取り敢えずの指導。「やってみろ」とやらせれば、すぐに出来るようになる。おかげで短時間で済んだな。

「よし！ちよつとあそこまで泳いでくる」

さすが霧生。クロールを泳げるようになったな。小学生の頃に一緒にサッカーをしていたけど、運動神経なら女子の中なら1、2位を争うのに、運動部に入らないのは勿体ない気がするな。

「いい感じだ。今のところクロールだけでいいかな」

「泳ぐのって楽しいな！！」

霧生も泳げるようになったし、皆でビーチバレーでもするかな？

「おい！梨子！！」

浜辺で休んでいる梨子を呼び掛ける。反応しないので近くに行って呼ばうとしたが、

「ぜえぜえぜえ……………」

「はあはあはあ……………」

…………… 梨子とチハだろうか？さっきまでビーチバレーをやっていたみたいだが、ここまで疲れてるって何してんだよ……………。

「大丈夫か？」

「…………… まだ51対51」

「…………… 2点差をつけて終わらせてやる……………」

結果は100までいったみたいだったな。疲労困憊の2人は部屋で休むため皆でやろうとしていたスイカ割りを休む羽目になったとき。

「雨崎さん。右ですよ？」

「優輝！フルパワーで行けっ！！」

「越後。ヒントを出せ」

「雨崎！反対だぞ？」

優輝がスイカ割りに挑戦中。ヒントは全くのでたらめ…………… どころかまずヒントじゃない人も何人かいる。アカネなんてスイカの位置をずらそうとしていたので、浅井が持っている。

「京介！ヒント！」

「右に50メートル。そして左に8メートルにスイカがある」

「嘘つくな！！」

「本当だ。ちなみに全部で14個ある」

「それ売店じゃないか！？」

結局、優輝はなぜか惜しいところまでいった。ラストは俺だけ目隠ししてても場所がわかるんだよな。

「京介！右だよ！」

「嘘をつくな。右には林しかない」

「京介！そこだ！！振り下ろせ！！！！」

「まだ1歩も動いてないのにスイカがあったらゲームにならないだろ」

「黒崎！前に80メートルだ！！」

「目隠しでの水泳は危険すぎるだろ！！アカネに言ったらマジで行くぞ！？」

「黒崎さん。斜め右にスイカです」

「……………本当みたいだな」

まあ、足の感覚でどこにあるかはわかるんだけど、斜め右に……………。

「あれ？スイカ移動してないか？」

素朴な疑問。スイカが俺に向かって転がって来てるんだが？……………アカネだな？

「どおりや！！！！」

ビチャッ！！

よし！当たったな！！動いているからって大したことないぜ！目隠しをとってスイカを確認する。

「……………」

おかしい。どうしよう。今の状況を整理したほうがいいかな？

スイカを割った。

そのスイカは他の人のみたいでゴツイおっさんにスイカがかかっている。

なぜかわからないが見つめられてる。

俺、猛ダツシュ！

「お前ら！！何かわからんが死にかけたぞ！？あの目は俺を殺る気だったぞ！？」

「すみません。私が冗談を言ったせいで……………」

「京介も売店に行かせようとしてなかったかい？」

素直に浅井に謝れ、よく考えたら俺も冗談言ってたな。

「予備のスイカをその人に返してこようよ」

「うん。そうしたほうがいいな」

で、越後と俺が返しにきました。

「さっきはすみませんでした。予備のスイカを持ってきましたので」

「いや、気にしてなかったがありがとう」

意外と気さくな人だな？筋肉ムキムキで少し怖いんだけどよ。

「それにしても……………」

「「？」」

「いい筋肉をしてるな？何の部活をしてるんだね？」

「野球だよ！やっぱり男は野球が1番だよな！？」

「あ、ああそうだな」

目付きが怖い。殺る気の漢字が間違ってる気がする。むしろ犯る気のほうが……………」

「実は俺もプロ野球の筋肉コーチなんだが」

「マジかよ！？何か筋肉のつき方が違うな」と思っていたんだ！」

「ほう？わかるのか？筋肉のつき方が？」

やべえ。ここから消えたい。空気のようにスーツと消えないかな……………」

「やっぱり官取選手の筋肉は凄えと思うぜ！！」

「官取は俺の担当だよ。見所があるな君！」

「俺は越後竜太郎っす！」

「俺は鬼鮫清二だ」

俺は空気のように去り、その場を離れた。あの人と関わっちゃいけない。というのが俺の頭に響いている。ソイヤ！ソイヤ！ソイヤ！ソイヤ！と聞こえてきたのは幻聴だ。うん。

「あれ？ラは？」

うは越後のことだぞ？再確認しとくが。

「男と男で筋肉の話で盛り上がってるよ」

「……………うげえ」

霧生は何か想像したらしく、凄く嫌な顔をしていた。さっきまでの俺も多分、そんな顔をしていたんだろう。

「人数減っちゃいましたね……………」

「あれ？優輝は？」

そつえばいないな。越後とスイカを渡しに行った時は居たのに。

「千羽矢さんの様子を見に行くらしいです」

「……………水着のまま部屋で休んでいるのか？」

少し険しい顔で霧生が聞いてきた。え〜とビーチバレーをやって2人とも倒れたから運んだからな……………。

「多分、水着だ」

「私もちよつと様子を見てくる」

霧生もいなくなって俺、浅井、アカネだけになっちゃったな。このメンバーでやることか……………。

「昼飯でも作るか？そろそろ1時だし」

「そうですね。霧生さんも喜ぶと思いますよ」

「お兄ちゃん！アカネは何をすればいいですか？」

アカネはあれだけ暴れて元気なようだ。梨子とチハが暴れすぎなだけか。

「梨子達には焼きそばでいいか。そこで買えるし」

「私達が買ってきますよ。アカネちゃん、行きましょーうよ」

ついに俺1人か……。ここは定番の焼きトウモロコシの準備でもするか。

4 回表 水着（後書き）

ホンフー「今日は何を話しましょうか？」

京介「毎回いるよな。ホンフーさん」

エアレイド「後書きなんですから何をしてもいいんですよ」

竜太郎「官取はプロ野球選手なのか？」

作者「鬼鮫の犠牲者1号だ」

京介「2号がいるのか……………」

夏菜「私って泳げない設定かよ!？」

作者「いいだろ？ちよつと欠点があると可愛いつて聞いたことがある」

京介「それ絶対、電視から聞いただろ……………」

作者「よし！次の裏話はホンフー×京介で」

梨子「また!？」

京介「俺が読者に変な目で見られんだろ」

ホンフー「もう見られてるんじゃないかしら？」

作者「ミーナ、ホンフーはバグとか言ってたからな」

ミーナ「ワタシもですか」

ホンフー「准さんは彼女候補入りましたからね」

京介「次の裏話は普通のだろ？」

作者「うゝん。当初は表と同じシーンを書こうと思ったんだけど」

アカネ「アカネの昔話で出来なくなったと」

作者「その通りだ」

京介「取り敢えず、もう鬼鮫は出さないでくれ……………」

4回裏 勝負（前書き）

そろそろパワポケ関係のイベントをやるのかな。

バトルディッガーとか秘密結社とかは無理だけど、カエサリオンや
らジャジメントとか出します。

今回は石川梨子視点で。

4回裏 勝負

あたしの名前は石川梨子！今日は海に行く予定だったけど、朝早く集合なのに遅くまで起きてたせいで眠い…………。

「おはよう……………」

「……………」

朝6時で始発だからね。5時起きになっちゃったけど、京介と海に行けるならあたしは嬉しいな。

「皆眠そうだな！？」

「あ、京介おはよう」

来た来た。あたしの幼なじみの黒崎京介。勉強、スポーツ、ルックスは全部申し分ないから皆に人気なの。あたしは京介に特別な感情を抱いている。昔、川に落ちた時に助けてくれたのは京介だった。その頃からあたしは京介のことが好きになったのに…………。鈍感すぎるよ。

「おーいアカネ。そろそろ自分で立て」

「んう。……………」

「ダメだ。寝呆けてる」

京介の義妹のアカネとも仲良くなったけれど、アカネが羨ましいわよ。京介に手料理作ってもらったり、朝に起こされたりなんて…………。

「おいおい、チハ以外眠そうだな」

「私は早く寝たのにお二イは遅かったみたい」
「そろそろ電車が来るね」

夏菜も漣も目が閉じちゃったね。あたしもそろそろ限界が近いのに……。

「起きろ！！アカネ以外は自分で歩け」

……京介ごめん。あたしも……限界。

「うっうん」

「やっと起きたか」

「梨子さんも眠かったんですね」

起きると京介とチハちゃんがいた。隣の夏菜は寝てるみたいだけれど……あれ？あたしはどうやって電車に入っただの？

「でもズルいよ。京介君はアカネちゃん以外運ばないって言ったよね？」

「突然、梨子が倒れそうになったんだからしょうがないだろ」

……もしかして京介に運ばれた？話の内容からして、肩を支えら

れたのかな？覚えてないなんてあたしの一生の不覚ね。

「3人で何かするか？」

「私、一応ランプ持ってるけど？」

「あたしはパス。まだ頭が起きてない」

隣で京介とチハちゃんがスピードをやっている。……………レベルが高いわよ！！どっちも人とは思えない動きしてるよ。

「引き分けか」

「えっ！？スピードで引き分け？」

あたしは場を見てみるとお互いに出してないカードは1枚。……………しかも1回も止まらずにやっていたよね？本当に人間かな？

「次は〱小波海水浴場」

「着いたか」

「梨子。霧生を起こしてやってくれ」
「うん」

夏菜の肩をゆする。京介はまたもやラと浅井と雨崎とアカネを起こしている。夏菜は目を覚まして周りを確認すると「わっ！」と言って飛び上がった。

「どうしたの？夏菜」

「梨子！口の周りに何かついてないか？」

夏菜の顔を見る。特に変わった様子はない……………ね。

「大丈夫だよ」

「寝言は!？」

「えーっと。霧生さんですよね？」

「う、うん」

あ、そつか。チハちゃんと夏菜は初対面だったね!この2人もいい仲になるとあたしは思うね!!

「突然、『料理は火力だぜ!!』って言うてましたけど……」
「っ!?!………恥ずかしいな」

きつと京介も聞いていたのかな。京介の性格は人思いだからきつと黙ってくれるよね。

「お降りの際は忘れ物を」

「皆、荷物持ったか？」

その言葉を言った後、電車の扉が開いた。

「海だっ!！」

「海ですっ!！」

「泳ぐぞっ!！」

あたし達3人は海に向かってダッシュ!1回海に来たらこれをやらないとね!!

「荷物置くから戻ってこい!!梨子!アカネ!!チハ!!！」

京介が大声で言ったので、あたし達は戻った。アカネだけは本気で海に向かって走っていたので確保しました。

「各自着替えてから、ここに集合だな」
「了解！」

男子更衣室にアカネが行ったのは謎だったけど、女子皆で更衣室に入った。

「夏菜って胸大きいね？」

「突然何を言うんだよ！？」

無言だったから女子のスタイルについての話をしようかな？

「チハちゃんはスタイルいいですね！？」

「ありがとうございます。浅井さん」

確かにチハちゃんも勉強、スポーツ、ルックスはどれも申し分ない。後輩に天才美少女がいるという話を聞いて見に行ったあたしは少し驚いた。京介と仲良く話していたからだ。あの後聞いたら「優輝の妹で幼なじみだ」と言っていたのにはショックを受けた。あたし以外にも幼なじみの女の子がいるなんて……。

「梨子さんだってスタイルいいじゃないですか？」

「私もいいと思います！」

「ありがと。でもチハちゃんには負けるね」

今ではチハちゃんと話すようになったけれど、きっとチハちゃんも京介のことが好きなんだ。桜空もきつと京介のことが好きだからあたしは負けられないように頑張らないうねっ！！

「浅井はワンピースなんだな」

「はい。桜華から借りましたけど、私に似合うかな………」

漣は白のワンピース。漣のイメージは純粹だから似合ってると思う！きつと京介なら……………」

「京介ってどんな感じの水着が好きなんだろう？」

「お兄ちゃんはですね！普通の水着がいいそうです！！」

アカネから有力な情報が聞けたけれど、普通の水着が好きってどういうこと！？京介って男子なのに部屋にはあっち系の本とかそっち系のビデオが1本もないんだもん！ありえないわよ！

「それってアカネに対して言っただけじゃないか？」

「お兄ちゃんが『普通の水着が1番いい』って言ってました！」

……………それはきつとアカネが着るならってことじゃないかな？

「準備出来ました！アカネ行ってきます！！」

「アカネちゃん！1人は危ないよ！」

着替えが終わったアカネと漣が更衣室を出ていった。

「ああ！？アカネがビーチバレーボール持っていったな！？」

夏菜も着替えが終わり更衣室にはチハちゃんとあたしだけ。チハちゃんの水着は少し肌の露出が多くて、男子なら皆が釘付けになりそうだった。

「チハちゃん。京介に色気って効くのかな？」

「……………梨子さん。私もこの水着選んで後悔してます。普通の水着で良かったんじゃないかって」

この海に行くイベントは京介との距離を縮めようとするためだった。そのため男子が喜ぶ女子の水着姿で頑張ろうと思ったのに…………。

「…………京介に直接言ってみよう!!」

そうだ。あたしにはストレートで言うほうが似合ってる。きっとそれは京介も思っていることだろう。

「待つて! 梨子さん!! 私まだ準備が…………!!」

更衣室を飛び出し一直線に皆のいるところへ。アカネと夏菜は遊んでるし、漣は顔を赤くしてるのは何があったんだろう?

「こらゝ置いてくな!!」

「梨子さん! 1人にしないでくださいよ!!」

チハちゃんも来て全員集合!! 雨崎が目を逸らしたのはチハちゃん
のせいね。

「よっ! 京介」

「よう、梨子」

「……………」

しばらくの沈黙。…………京介は女心が本当にわかってないね!

「水着につっこみなさいよ!!」

あたしの本音を全力で叫んだよ。京介に水着を見せるのは初だよ! ? 「可愛いな」とか「似合ってるぞ」とか一言あってもいいでしょ

！？

「梨子。泳ぎやすそうな水着だな」

「…………ボケてるのかな？梨子ちゃんを怒らせたら海で地獄を見てやる。」

「うわっ！？凄い微妙なところつつこまれた！？水着だけじゃなくてあたしも含めてで！」

「ん？梨子とその水着似合ってるぞ」

「やった！！京介に言ってもらった！！昨日新調しにいった甲斐があったね！」

「さすが京介！わかってるね！」

「京介君！私のはどう？」

「チハちゃんの水着に対して京介は動揺することはなかった。後ろの雨崎はめちゃくちゃ動揺してるけど。」

「チハ、似合ってるな」

「何か適当になってない？」

「今のチハちゃん言葉は聞き捨てならないね。適当だったら喜んでいたあたしが馬鹿みたいじゃん！！」

「…………京介？」

「いや、俺の心からの本心だ」

「黒崎？目が泳いでるぞ？」

あたしは京介とじっくりお話をしたいところだけど、

「……………まあ、京介に似合ってるって言われたから満足かな」
「そうですね……………」

さうて海に来たからには遊びに遊びまくって、泳ぎに泳ぎまくるよ
っ！！

「待てええ！！優輝！！」

「おニイ！私が沈めてあげるから！！」

「雨崎！待ちなさいよ！」

雨崎君を追いかけて沈めたら勝ちという意味不明なゲームをやっているのは、どうしてだろう？

「こうなったら……………」

チハちゃんが海に潜った！あたしとラは雨崎を追いかける！そして
暴発動！チハちゃんが雨崎を沈める！

「よっしゃ！勝った！！」

1回戦はチハちゃんの勝ち。でも次は絶対に負けられないね！勝った方が京介君と午後の祭りと組むことになっている。くじ引きで同じ番号同士で行く話だったけど、仕組んで京介と祭りに行こうとするチハちゃんを止めて（あたしも京介と祭りに行きたいから）、勝負しているのに初戦は敗北。

「2回戦はビーチバレーね」

「梨子さん！1対1でやりませんか？」

1対1？チハちゃんめ……。何か企みがあるのね？でもあたしだって2対2でパートナーを組んだらパートナーによって勝敗が変わる。

「いいわよ？」

「半面でトス、レシーブ、アタックを1人でやるでいいですか？」

今考えるとそうとう無茶苦茶な考えだね。凄く疲れと思うけど、京介とのデート券は譲れないわよ！！

「おーい！梨子ー！！」

……………京介？あたし頑張ったよ……………。

「ぜえぜえぜえ……」

「はあはあはあ……」

そう言いたかったけど、ビーチバレーはただでさえ疲れるのに半面でも15位からマラソンを走った並になったよ……。

「大丈夫か？」

「……まだ51対51」

「……2点差をつけて終わらせてやる……」

その後の勝負はサーブがまともに入らず、熱天下の中でずっと立っていたので、ダウンした。本格的な脱水症状が……。

「トラブルメーカーと言うか自爆してんじゃねえか」

京介かな？少しぼやけていてわからないや。京介？におんぶで運ばれて……。

「京介……！降ろして！」

「まともに立てないくせにそんなこと言うのか？」

他にも運び方があるんじゃないの！？さすがにあたしでも恥ずかしいって！！

「恥ずかしいよ……！」

「ん？お姫さま抱っこはお断わりだ。俺が恥ずかしい」

肩貸してくれるだけでいいのに！と言える状況じゃないし、何か言っておんぶで運ばれないのも勿体ないよ。

「しばらく部屋で休んどけ。千羽矢もな。優輝ありがとう」
「……俺も恥ずかしかったぞ」

チハちゃんは雨崎が運んだのかな？京介と雨崎は部屋を出ていった。

「梨子さん。勝負は引き分けにしませんか？」
「え？何で？」

チハちゃんは苦笑いして、

「京介君は私より梨子さんを優先して運んだんですよ。口では言わないけどきつと京介君は梨子さんのことを大事にしてるんですよ」

京介があたしのことを大事にしてる？

「悔しいですけど、私は梨子さんに負けたのと同じです」

「引き分けよ」

「えっ？」

「鬼ごっこで負けたからね。一勝一敗だよ」

チハちゃんとの勝負は引き分け。京介と祭りに行くのはくじ引きになる。

「じゃあ、京介君と祭りに行くのはくじ引きですか？」
「うん。負けないからね！」

そろそろ京介が帰ってくる。仕組みも一切なしの運勝負！京介とお祭りデートなんて年に1回あるかどうかだから！！

4回裏 勝負（後書き）

梨子「メインヒロインのあたしが何で4番目の裏主人公なのよ!？」

作者「何回も裏主人公で出すから黙りなさい」

ホンフー「私も海に行きたいわね」

夏菜「無理だな」

千羽矢「無理ですね」

京介「無理を言うな」

ホンフー「別にいいじゃないですか？」

優輝「係員の人に止められると思うけど……」

京介「止められるだろ。俺だって初対面の時に女だと思ったからな」

ジナイダ「黒崎京介は驚いていたな。ホンフーが男だと知った時に」

桜空「女じゃなくて良かったです……」

京介「学校でのイベントはないのか？」

作者「だって、始まりが先輩の引退時だからね。まあ、体育祭なり文化祭なり出すよ」

千羽矢「質問！私って化け物設定？」

作者「さあな？それは話の流れ次第だな」

京介「野球する気ないよな。これ」

作者「当たり前だ。それがパワポケクオリティだろ」

京介「えー？せめて試合の1つ位はいいだろ？」

作者「試合の描写って面倒だし」

優輝「えー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8083z/>

野球馬鹿の破茶目茶物語

2012年1月8日19時48分発行